



夢違師

ゆめたがし

○ 登場人物表

神楽坂蒼夏羽	(39、17)	金剛山観音寺の住職
榊綾乃	(16)	幽霊
千石義久	(41)	観音寺の住み込み僧
櫻井哲夫	(37、34)	刑事
和田敬吾	(32)	刑事
奥寺聡美	(34、33、31)	櫻井の元恋人
長谷川一義	(59、57、31)	長谷川建設の前社長
長谷川和恵	(56、54、31、28)	一義の妻
長谷川隼人	(25、23)	一義の息子
長谷川清志	(79、54、51)	一義の養父
高尾副社長	(59、31)	長谷川建設の副社長
板倉専務	(64)	長谷川建設の専務
早野課長	(40)	長谷川建設の社員
村田兼三	(58)	村田技建の現社長
村田博史	(61)	村田技建の前社長
黛 仁美	(55)	村田技建の社員
黒川克英	(59)	黒川会の組長
佐伯貴明	(47)	黒川会の若頭
大貫常広	(35)	黒川会の構成員
野原 勲	(47)	竜富産興の社長
赤堀和紀	(27)	竜富産興の社員
岡田祐介	(31)	長谷川建設の社員
岡田絵里子	(27)	岡田の妻
木村係長	(38)	公務員
滝田署長	(58)	警察署長
傍島冬美	(50)	
野原美佳	(23)	

○ 金剛山観音寺・参道

南大門へ向かう勾配の急な坂道を、大勢の参拝客が登っている。四囲は草木に覆われており、カナカナとヒグラシが鳴いている。参拝客の脇を、観光バスが徐行し通り過ぎていく。

○ 同・本堂

歴史の重みある古びた本堂、その中。

地元の観光ボランティア（男・高齢）が、群がる観光客を相手に解説をしている。

観光ガイド「このね、御本尊の観世音菩薩、地元じゃ夢違観音（ゆめたがいかんのん）って呼ばれててね…あ、この中に悪い夢ばかり見る人っている？」

観光客のうち何人かがすつと手を挙げる。

観光ガイド「ああそういう人ね、そういう人はこの観音様をお願いしとくといいよ。悪い夢をぜーんぶ良い夢に変えてくれるって、昔からそう伝えられているんだ」

○ その、観世音菩薩立像

半分ほど開いた瞳（半眼）が、何かをじっと見つめているかのよう。

○ 同・書院、表

入口からずらっと十数名程の老若男女が列をつくり並んでいる（順番待ち）。

○ 同・書院、中

畳敷きの広々とした部屋。

艶やかな和風着物姿の神楽坂蒼夏羽（かぐらざか・あげは／39）、黒系のロリータ・ファッション（いわゆるゴスロリ）の榊綾乃（29）が並んで座して、座卓を挟み、エルメスのスカーフが目につく傍島冬美（50）と対面している。
壁際には、千石義久（42）が門番のごとく黙して立っている。

冬美「大学院へ通ってる娘がね、何て言うんですか、アカハラですか、先生からヘンなこ
とされてるんです…私ね、もう許せなくて……」

蒼夏羽「ヘンな、こと？」

冬美「だから、その、んー、つまり娘の同級生がね、ホテルから一緒に出てくるとこ見て
るんです」

綾乃「案外女の方からケツ振ってんじゃね？」

蒼夏羽、隣の綾乃をキッと睨みつける。綾乃、そっぽ向く。

冬美「？」

冬美からは、綾乃の姿が見えていない、声も聞こえていない。
横を向き何かを睨みつけた蒼夏羽の仕草に「？？？」となる。

蒼夏羽「…大学へ訴える、とか？」

冬美「うやむやにされそうで…まずは事実を押さえておきたいんです。娘に訊くわけにも
いかず…先生には、千里眼があるんですよねえ？」

冬美、エルメスのバッグから封筒を抜くと、座卓の上に置く。

冬美「御布施だと思ってください。二〇万円あります」

蒼夏羽、ためらうことなく封筒を手に取り、収めて、

蒼夏羽「実はね、本堂の屋根を修繕したいの。ところどころ雨漏りしてて…」

綾乃「さすが金の亡者」

蒼夏羽「（綾乃を睨んで）家計が逼迫してるのッ」

綾乃「だからエステをやめろ、エステを」

冬美「（それが蒼夏羽の独り言に見えて）？」

○ ××大学・キャンパス（日替わり）

大勢の学生たちが行き交う。

○ 同・研究室

ソファに腰掛けた老教授が膝の上に若い女（冬美の娘）をのせている。
ドアから、綾乃が幽霊のようにすっとすり抜けて入ってくる。
女、体をよじって、老教授に口づけする。

冬美の娘「先生、大スキ」

老教授「私の後継者は君しかないと思ってる……」

綾乃「（抱き合う二人を見て）ほらみろ、女の方からケツ振ってる」

○ 某高級エステサロン・施術ルーム

蒼夏羽、ベッドにうつぶせに横たわっている。

エステティシャンが、蒼夏羽の背中（裸）をマッサージしている。

蒼夏羽「（至福に満ちた表情）」

○ タイトル「夢違師（ゆめたがいし）」

○ 高崎警察署・外観（日替わり）

地方の、やや老朽化した庁舎。

テロップ「2013年・春」

○ 同・廊下

滝田署長（58）の背を、櫻井哲夫刑事（37）が追いかける。

滝田のそばに、和田敬吾刑事（32）もいる。

櫻井「署長、待ってくださいよ」

滝田「（振り返って）くだいなあ、自殺でケリがついたんだ」

櫻井「違いますって、他殺他殺、絶対に他殺」

滝田「根拠もなく直感で言うのはやめにしろ、いいかげん」

櫻井「今回は証拠があるんですよ、ホントに」

滝田「勝手にやってろ、独りでな」

櫻井「……」

滝田、呆れて離れていくと、櫻井、その場に残っていた和田へ、

櫻井「よし、いつものように署長の許可がでた。勝手にやっていいって」
和田「は？」

○ ××アパート・外観（夜）

2階建てのコープ。

○ 同・櫻井の部屋（夜）

櫻井と和田、酒を飲んでいる。

櫻井「あのさあ、上腕内側の皮下出血とか、それって他殺の常識じゃない」

×

×

×

フラッシュ（櫻井の想像）。

何者かが、奥寺聡美（34）をマンションのベランダから突き落とす。

×

×

×

和田「7階から落ちてるんですよ。地面に叩きつけられたせいじゃないですか」

櫻井「バツカじゃねえのッ。（上腕の内側を叩いて）内側だよ」

和田「遺体はうつぶせでした。それに、もし突き落とされてたら垂直には落ちてませんよ。

着衣の乱れもなかったですし：」

櫻井「ホシは長谷川一義で間違いないんだ」

和田「確証が無いでしょ」

櫻井「奥寺聡美は長谷川の愛人だった。邪魔になったから殺された」

和田「それをどうやって立証するんです？」

櫻井「監視カメラに映ってたグラサン男、超お怪しい」

和田「2時間も前ですよ。それにその後、当の奥寺聡美本人が外へ出てます。それこそカ

メラに映ってます。グラサン男は無関係ですね」

櫻井「……」

和田「室内に争った形跡もないですし：」

櫻井「殺してから片づけたんだ」

和田「そんな時間ないでしょ。通報の後、すぐ現着してます。それに、玄関ドアは内側から鍵がかけられていました。他殺なら、これって密室殺人ですか？」

櫻井「和田なあ、少しはオレの味方をしてくれよ：」

和田「客観的な判断をしているんです。それに、一万歩譲って長谷川がホシだったとして、今は事故で寝たきり、植物状態でしょ。ゲロさせようがない、というか、そんな奴バクってどうしたいんです？」

櫻井「……」

和田「はっきり言って、個人的感情が入り過ぎですね」

櫻井「……」

○ 櫻井の実家・表（半年ほど前・櫻井の回想）

雨が降っている。

門構えの前で、傘をさした奥寺聡美が独り立っている。

櫻井がやって来て、聡美の姿をそこに見つける。

櫻井「（聡美に気づいて）……………」

聡美「（櫻井に気づいて）テツちゃん……………」

櫻井、やや躊躇しつつも、聡美へ寄る、が、二人、どこか気まずそう。

櫻井「……………親父に、会いに来たのか？」

聡美「まあ、うん……………」

櫻井「すぐ戻ってくるよ」

聡美「うん……………」

櫻井「車庫に、車があるから」

聡美「……………テツちゃん、実家に帰ってたんだ？」

櫻井「違うって、母さんの命日だから……………警察を嫌ってる親父とは暮らせねえよ」

聡美「先生（※櫻井の父のこと）、相変わらずなんだ……………」

×

×

×

フラッシュ（20年前）。

深夜、リビングに入り、灯りをつける櫻井の母（30代）。

その眼前に、刃物をもった強盗がいる。

櫻井の声「母さん殺したヤツを、結局警察はあげられなかった。それが親父には、どうに

も許せないんだ……………」

○ 同・リビング（同、半年ほど前・櫻井の回想）

櫻井と聡美、ソファに並んで腰掛けて、テレビを見ている。

櫻井「……………どうしてんの、今？」

聡美「何が？」

櫻井「……………好きな人とかさ、できた？」

聡美「……………私、妊娠してるんだ（※妊娠1ヶ月・お腹の膨らみはない）」

櫻井「……」

聡美「……」ごめん」

櫻井「え、なんで謝んの」

聡美「あれからね、私、家庭のある人好きになっちゃった……黙っててごめん、メールも無視って……言えなくて……」

櫻井「……」

聡美「ホントごめん……」

櫻井「だから謝ンなって。なんか惨めになる、オレ……」

聡美「産むべきかどうか迷ってる。それを先生に、相談したくて……」

櫻井「……」

聡美「あ、ごめん、聞きたくないよね……」

櫻井「……相手には妻子がいるんだろ？」

聡美「まあ、うん……」

櫻井「だったら、産むなよ」

聡美「……」

櫻井「……相手は、何て言ってるの？」

聡美「まだ教えてない……」

櫻井「そういうの、親父にどういわれて決めることか」

聡美「迷ったときはいつも先生に相談してきた。ずっと昔から、そうしてきたから」

櫻井「オレと付き合うときも、親父に相談したか？」

聡美「それは……」

櫻井「……親父、どんな教師だった？」

聡美「言ったよね。初恋の相手だって……そっちこそ、どうなのよ」

櫻井「何が？」

聡美「付き合ってる人とか、いるの？」

櫻井「目下恋活（こいかつ）中だよ、恋活」

○ 同・表（時間経過）

門構えの外で、櫻井が煙草を吸っている（聡美を待っている）。

聡美が、表へ出てくる。雨が止んでいる。

櫻井「長かったな……結論、でたのか？」

聡美「産むことにした」

櫻井「……本気かよ」

聡美「うん（微笑む）」

櫻井「親父止めねえのか…」

聡美「もう産むって決めてから来たんだろって、目を見たらわかるって、言われちゃった……私の中でね、命が育ってるって、すっごく感じるの……わかる？」

櫻井「わからん……でもおまえ、一度決めるとブレねえから……」

聡美「ブレないねえ……あ、ちょっと前の法改正で時効が廃止になったって？」

櫻井「ああ、うん、殺人罪の」

聡美「先生言ってた。お母さんの仇を今度こそ逃がすなって」

櫻井「言われなくてもわかってる」

聡美「それと、頑張れって、こんな悲しみを背負うのは自分だけでたくさんって」

櫻井「……」

聡美「……雨、あがったね」

聡美、大きく伸びをする。

聡美「シングルマザーになるんだよ、私」

聡美、へへっと笑顔をつくって気丈な姿（決意）を櫻井に見せる。

○ 同・仏間（同）

櫻井、襖を開けて入ってくる。

そこに、位牌を見つめ、線香をあげている父（60代）の後ろ姿がある。

櫻井「（父の背中を見つめて）……（何か声をかけようとする）」

○ アパート・櫻井の部屋（深夜・回想おわり）

櫻井と和田が雑魚寝している。

櫻井は目が覚めていて、じっと天井を見つめている。

櫻井「オレは、いつも大切な人を守れない……」

×

×

×

フラッシュ。

リビングに横たわる、刃物でメッタ刺しにされた母の遺体。

×

×

×

聡美の、地面に叩きつけられて頭が割れて、血まみれになった遺体（うつぶせ）。

○ 金剛山観音寺・参道（日替わり）

一台の車が登ってきて、参拝客の脇を通り過ぎていく。

○ その、車の中

和田が運転し、助手席には櫻井がいる。

和田「テレビの観すぎですって、超能力捜査とか、そういうの。勘弁してくださいよ」

櫻井「学校の職員室へ小包爆弾送ったオタク野郎いたろ」

和田「また自慢話ですか」

櫻井「あいつの隠れ家みつけたの、実はオレじゃなくて神楽坂蒼夏羽の千里眼」

和田「…冗談でしょ？」

櫻井「証券マンが殺された密室事件あったろ」

和田「ありましたね、本格ミステリみたいなの」

櫻井「あれだって千里眼で解決したんだ。黙ってたけど」

和田「櫻井さん…昨夜のお酒、残ってるんじゃないです？」

○ 金剛山観音寺・書院

蒼夏羽と、櫻井・和田が対面している。

蒼夏羽の隣には綾乃、出入口の襖付近には千石が立っている。

座卓の上に、事件の関連写真が何枚か並べられている。

櫻井「こいつが長谷川建設の社長だった長谷川一義」

櫻井が指さす写真に、長谷川一義（56）の上半身が写っている。

櫻井「長谷川は奥寺聡美を囲ってた。妊娠したから邪魔になった」

蒼夏羽「で、殺（あや）めるか？」

綾乃「久々に血の匂い…（わくわく）」

綾乃の姿は櫻井・和田には見えていない、声も聞こえていない。

蒼夏羽「妊娠が嫌なら堕ろさせようとするだけでしょ」

櫻井「産むと言って聞かなかったら？」

蒼夏羽「だからって殺めるか？　ありえない」

和田「同意見ですね。間違いなく自殺です。（櫻井を指して）なのにこの人、それを他殺って言い張るんですよ」

櫻井「あいつが自殺なんて絶対ないんだ、マジでない」

蒼夏羽「…知ってる人？」

櫻井「親父が中学で教えてて…」

和田「ていうか、この人の元カノです」

蒼夏羽「ふーん…（櫻井を見る）」

櫻井「あ、結構前に別れてるから、結構前に」

蒼夏羽「そこ、べつに興味ないけど」

櫻井「……まあ、なんていうの、オレはな、あいつの死の真相が知りたいんだ」

和田「真相も何も……」

櫻井、財布からキャッシュカードを抜いて、座卓に置く。

櫻井「頼む…また千里眼で調べてくれ」

蒼夏羽「私は観世音菩薩の使いなの。お金で動くと思う？」

櫻井「まだ夏ボ使ってないんだ。まるまる残ってる」

蒼夏羽「……しつかにないねえ。いいわ、ちょうど庫裏の外壁直したかったから。破損のひどい箇所があってねえ」

綾乃「直すの、壁じゃなくてお肌の破損だろ」

蒼夏羽、キッと綾乃を睨みつける。

櫻井「いつものように、出来高払でな」

櫻井、キャッシュカードを再び財布にしまう。

蒼夏羽「さっきの話ね、早速確認するけど、社長の長谷川は昏睡状態って言ったよね？」

櫻井「ああ事件の直後、交通事故で。天罰が下ったんだ」

蒼夏羽「だったら、仮に長谷川が犯人だったとして、捕まえてどうすんの？　寝たきりなんでしょう」

和田「そこですよ、そこ。僕もそれ言ってるんです。場所変えて医療刑務所で眠る…：ていうか、どうなるんでしょう、そういうとき…」

綾乃「死刑でいんじゃない？」

櫻井「だからって裁かれなくていいのかッ。言っただろ。オレは真相が知りたいって」
和田「（語気に押されて）……」

櫻井「このヤマは絶対譲れねえから……ここに綾乃ちゃん、いる？」

蒼夏羽「私の隣」

櫻井、蒼夏羽の隣へ、

櫻井「綾乃ちゃん、今回も期待してるよ」

和田「？」

櫻井「ここにはなあ、地縛霊がいるんだ」

和田「は？」

櫻井「千里眼の正体が実は地縛霊。誰にも喋んな。喋ったら呪い殺されるぞ。綾乃ちゃん
っていう、仁義なきバケモン」

綾乃「そんな力があつたら櫻井、とっくにてめえを殺（や）ってる」

×

×

×

（時間経過）蒼夏羽と綾乃だけが室内に残っている。

綾乃「自殺って何だ？ よくわかんねえな」

蒼夏羽「生きるのが辛いとき、人は自ら命を絶つの」

綾乃「生きるのが、辛い？」

蒼夏羽「綾乃にはわかんないだろうね。もし生きるのが辛かったら、死ねないあんたはノ
イローゼになる」

綾乃「これでもずっと昔は普通の人間だった、ような気がする……」

蒼夏羽「いつから地縛霊に？」

綾乃「地縛霊じゃねえって、神だよ神、あんたらが崇めてる神様ッ」

蒼夏羽「神？ ま、なんでもいいけど……」

綾乃「はじめて会った日のこと、覚えてつか？」

蒼夏羽「忘れないよ、あの日のことは……」

綾乃「あれが、自殺か？」

蒼夏羽「……そうだね……」

○ ビルの屋上（夜・22年前・蒼夏羽の回想）

制服姿の蒼夏羽（二）、屋上の端から、今にも飛び降りようとしている。

眼下の夜景が、とても綺麗だ。

蒼夏羽の声「言ったよね？ 母さんは私を産んですぐに亡くなった。父はいなかった、最初から。物心ついたときからお爺ちゃんのお寺に預けられてて…お爺ちゃん大好きだったけど、あるとき倒れて、ずっと看病してて、結局亡くなって…私のせいだって…母さん死んだのもお爺ちゃん死んだのも全部私のせいだって…あのときはもう、頭パニックでさ、わけわかんなくなって…独りぼっちで、生きてく力もなくなって…」

蒼夏羽の目の前、空中に、綾乃が浮いている。

綾乃「…おまえ、オレが見えんのか？」

蒼夏羽「…死神？」

綾乃「バカ、死神じゃねって神だよ神、あんたらが崇めてる神様ッ」

蒼夏羽「だったら、私をお爺ちゃんトコへ連れてってよ」

蒼夏羽、飛び降りる。

綾乃「マジかッ（仰天）」

綾乃、慌てて落下する蒼夏羽の襟首をつかむ、と、二人、宙に浮かんでいる。

蒼夏羽「……（茫然）」

綾乃「…オレも驚いてる、なんで今つかめてんのって…触ろうとしても、いつもは全部すり抜けるんだ…」

蒼夏羽「…（綾乃を見て）神様って、いたんだ……」

綾乃「一千年ぶりに出会った話し相手だ。簡単に死なせはしねえよ」

蒼夏羽「（綾乃をじろじろ見て）羽ついてないのね。ついてたら可愛いのに、そこが残念」
綾乃「手、放すぞ」

○ 喫茶店・中

櫻井と和田がいる。大きなパフェをがつっている。

和田「櫻井さんはもう、わけわかんないことばっか言ってえ、結局（小指を立てて）コレ

狙いなんですよ？ いやらしいなあ」

櫻井「は？」

和田「蒼夏羽ちゃん、でしたっけ？ すっごく可愛いじゃないですか」

櫻井「可愛い？」

和田「ちよっと年の差が気になりますけどね。犯罪ですよ」

櫻井「ていうか、歳を言うなら、蒼夏羽はオレより上だぞ」

和田「上？ 何の上です？」

櫻井「オレの2コ上だから…今年で39、なはず」

和田「誰のことです？」

櫻井「だから、蒼夏羽」

和田「え？ 20代半ばか、よくいって30手前でしょ」

櫻井「なんて言うの？ 美魔女？」

和田「美魔女過ぎるでしょ」

櫻井「あり金ぜんぶ美容に注ぎ込んでるって」

和田「絶対整形してますよ、歳が事実なら」

櫻井「え、マジ？（がっくり）」

和田「あ、やっぱ惚れてるでしょ、その反応」

櫻井「違う違う、惚れてない惚れてない」

和田「櫻井さん、すぐ一目惚れするから、相手が美人だと…」

櫻井「オレは自分の感性を信じてんだよ…そういうや、聡美も一目惚れみたいなもんだったな…」

○ 櫻井の実家・表（3年前・櫻井の回想）

玄関から外へ出てきた聡美（31）を、櫻井（34）が追ってくる。

櫻井「ちよっと待って！」

聡美、振り返る。と、櫻井がそばまで来ている。

櫻井「…ごめん、今声かけないと、オレ一生後悔すると、そう思ったから…だから、声かけたんだけど…オレのこと、覚えてるよね？」

聡美「……」

櫻井「聡美ちゃんがこんな美人になってるなんてオレ思ってたんで…大学いってからほとんど実家帰ってねえし…なんていうの、10数年にわたるニアミスを今更ながら恨むよ。オレの知ってる最後の聡美ちゃん、黒縁眼鏡に参考書だったもん…」

聡美「はあ……」

○ 長谷川建設・外観（日替わり・櫻井の回想、おわり）
業界大手の風格漂う本社ビル。

○ 同・廊下

綾乃、裸足でひたひた歩いている。
会議室の前で、立ち止まる。

綾乃「（ドアを見つめて）……」

綾乃、ドアをすり抜けて、中へ入る。

○ 同・会議室

長谷川隼人社長（25）、高尾副社長（59）、板倉専務（64）が奥の席にいて、その前に、早野課長（31）以下、数名の社員が立たされている。

隼人はヤンキースのキャップ帽を被っており、手には金属バット、両足はデスクにのせてふんぞりかえり、横柄な態度である。

綾乃、隼人の後ろに回る。

隼人「おまえらバカじゃね！ なに仕事とられてんの！ ……って、どこにとられたんだっけ？（隣の席の高尾に尋ねる）」

高尾、隼人に耳打ちする。

隼人「はあああ、村田技建なんてクソだろうッ！ なんで村田にとられんの？」

隼人、立ち上がって、

隼人「はい、ケツバットお（バットを振りかざす）」

早野「社長、うちは入札に参加できないんですよ。勝つとか負けるとか、現場じゃそれ以前の問題になってるんです」

隼人「なにそれ？」

早野「暴排条例のせいです」

隼人「ン？（高尾に尋ねる）」

高尾、席を立ち、隼人へ寄って耳打ちする（小声で説明する）。

隼人「…仕方ねえだろ。うちと黒川会は爺ちゃんの代から懇意にしてんだ。今更切れねえよ」

早野「それじゃ会社が潰れます」

隼人「うるせえな。おめえらが無能なんだ」

早野「そのうち銀行の融資すら……」

隼人「いいからケツだせ、ケツ！」

早野、隼人が寄ると、諦めて背を向けて腰を曲げ、尻を差し出す。

隼人「デレク・ジーターあ！（早野の尻を打つ）」

早野、「うつ」と呻いて、その場に崩れ伏す。痛々しい姿。

綾乃「……（呆れる）」

隼人「次ッ」

早野の隣にいた若い男も諦めて同様に尻を向ける。

隼人「イッチロ―っ！（男の尻を打つ）」

○ 同・廊下（時間経過）

板倉と早野が並んで歩いている。早野は暴行を受けたせいで足がフラフラ。

二人の後ろから、綾乃がひたひたついていく。

板倉「今は堪える。絶対にキレるな」

早野「なんであんなアホが社長なんスカ。親とは雲泥の差だ。くそっ、あの事故さえなければ……」

板倉「社長は跡を継いでまだ間がない。しばらく様子を見ようじゃないか」

早野「あのねえ専務…専務のこと、みんな陰で何て言ってると思います？」

板倉「…良くは、言っとらんだろうな……」

早野「日和見マン、ですよ」

板倉「……」

早野「このまま放っておくつもりですか？」

板倉「わかるだろ。社長は会長の孫なんだ。私なんかの力ではどうにもならん……」

早野「…話になりませんね。失礼します」

早野、板倉を残して去る。

板倉「……日和見マンか（微苦笑）」

高尾副社長が呼びにくる。

高尾「専務、ちょっと」

板倉、「はい？」と振り返る。

高尾「また警察が来た」

綾乃「……？」

○ 同・応接室

高尾・板倉と、櫻井・和田が対面している。

綾乃、ドアをすり抜け、中へ入ってくる。

高尾「だから、お話することは何もありませんって」

櫻井「奥寺聡美と、長谷川前社長のことなだけど…」

高尾「（遮って）知ってることは全てお話したって、今言っただけじゃないですか」

櫻井「……」

○ 同・エントランス

櫻井と和田、ビルから出るところ。

櫻井「本当に、長谷川の不倫を誰も知らなかったんだろうか…」

和田「さあ、どうなのでしょうね…」

○ 同・応接室

高尾と板倉がいる。綾乃がその場に残っている。

高尾「私のいないときにまた来たら、全て知らないで通せ。余計なことは喋るな」
板倉「……………はい」

綾乃、二人へ不審な目を向ける。

○ 高崎総合病院・外観（夜）

○ 同・長谷川一義の病室（夜）

壁際のソファで、隼人が母の和恵（59）に膝枕してもらい甘えている。

隼人「誰もオレのことを聞いてくれない……」

和恵「……………」

和恵、隼人の頭を優しく撫でて慰める。

わずかだが、「ううう」と、うめき声が聞こえる。

和恵、ベッドへ視線を移すと、植物状態（遷延性意識障害）の長谷川一義が苦悶の表情を浮かべている。

和恵「……またお父さんが、うなされてる……きっと嫌な夢を見てるんだわ」

隼人「親父なんか、どうでもいいだろッ」

和恵、隼人をソファに残し、一義のベッドサイドへ。

和恵「可哀想な、あなた……………」

隼人が、和恵のすぐ後ろに立つ。

隼人「こいつは、母さんを裏切ったんだよ」

和恵「……………」

隼人「わかってんのッ！ ……なのに、なんで毎日ここに来んのさ」

一義が「ううう」と、うなされ続けている。

和恵「（一義の手を握って）私が、そばにいるからね……………」

和恵、一義の頭を起こすと、愛おしそうに胸に抱く。
その姿が、どこか病的である。

隼人「……」

○ 金剛山観音寺・書院の前（日替わり）

千石、竹箒を使って掃除している。

和恵が、ややフラつきながら（※眠れていない）近づいてくる。

千石「（気づいて）……？」

和恵「（会釈する）」

○ 同・書院

蒼夏羽と綾乃がいる。蒼夏羽はフェイスパックをしていて顔面が真っ白。

綾乃「ありやとんでもねえドラ息子だ。ケツバットはねえよ」

蒼夏羽「学芸会の罰ゲームね」

綾乃「ま、とりあえず幹部が何か隠してんのはわかった」

蒼夏羽「それだけでも収穫か……」

襖が開き、千石が和恵を連れて入る。

千石「（顔面パックの蒼夏羽を見て）……」

×

×

×

蒼夏羽、和恵と対面している（フェイスパックは外している）。

そばに綾乃、やや離れて千石が立っている。

和恵「だから隠さないでください。私知ってるんです。先生が、あの高名な夢違師（ゆめ
たがいし）だって」

蒼夏羽「……」

和恵「お願いします。夫がずっとうなされてるんです。きっと悪い夢ばかり見てる……だから、お願いします（頭を下げる）」

蒼夏羽「私が夢違（ゆめたがい）やってるって、あまり知られてないと思ってたけど……」

和恵「いいえ結構知られてます、裏では」

蒼夏羽「裏？」

和恵「お金があればあるほど、お金では買えないものが欲しくなるんです。たとえば、夢、とか…」

蒼夏羽「……」

和恵「最愛の妻を亡くした某政治家が、先生にお願いして毎夜夢の中で会えるようにしてもらった。これって結構有名な話ですよ」

綾乃「あのデブ眼鏡、口軽いい」

和恵「もちろん御礼はさせていただきます」

蒼夏羽「…ちよっと事情があってねえ、夢違はあまりやりたくないの（と言いつつ、じろじろ和恵の顔を見る）」

和恵「…なにか、私の顔についてます？」

蒼夏羽「…お肌、綺麗ですね」

和恵「（笑って）ありがとうございます。一時期、私バカみたいに美容にハマっちゃって…業務用のエステマシンまで買っちゃったんですよ。大笑いですね」

蒼夏羽「え、どんなやつ？（興味津々）」

和恵「写真、ありますけど…」

和恵、スマホを手に取り、エステマシンの画像を蒼夏羽に見せる。

蒼夏羽「（まじまじと見る）」

綾乃「本格的だ」

和恵「二〇〇万もしたんです。ホントバカよね、今思うと……（蒼夏羽の真剣な眼差しに気づき）…あの、よろしければ、先生にお譲りしましょうか？」

蒼夏羽「えっ！ ホント？」

和恵「そのかわり明日、高崎総合病院まで来ていただけません？ 夫は寝たきりで、動けませんので…」

蒼夏羽「寝たきり…？」

和恵「夫はもう、目覚めることがないんです。だからせめて夢の中で、幸せでいてほしいって、そう思うんです…ずっと、ずっとね……」

蒼夏羽「……」

○ 高崎総合病院・外観（日替わり）

○ 同・一義の病室、表

和恵が、蒼夏羽を迎え入れる。綾乃もそばにいる。

和恵の後ろには隼人がいて、艶やかな着物姿の蒼夏羽を訝しそうに一瞥する。
綾乃が隼人に気づき、「！」となる。

和恵「お待ちしていました。さ、中へ」

和恵・隼人、病室へ入る。

綾乃「おい、あいつが長谷川んトコのドラ息子…」

蒼夏羽「え、マジか？」

綾乃「ウソじゃねえよ」

蒼夏羽「世界超狭め…あ、旦那さんって」

綾乃「櫻井の言ってた長谷川一義」

蒼夏羽「…になる、よねえ」

綾乃「どうする？ やんのか？ 夢違（ゆめたがい）」

蒼夏羽「二〇〇万だから、エステマシン」

綾乃「あ、そっちね…」

○ 同・病室、中

昏睡状態の一義がベッドに横たわっている。

蒼夏羽が筆で、一義の額に観世音菩薩の種字（梵字）である **𑖀** を朱書きしていく。
和恵と隼人、ソファに座ってその様子を見つめている。そばに綾乃もいる。

綾乃「……（様子を見守る）」

蒼夏羽、筆を置くと、両手で印を結び（※観世音菩薩印…両手の親指と小指をつけて、つばみのように開く）、

蒼夏羽「南無観世音菩薩（なむかんぜおんぼさつ）…夢違をはじめます…」

蒼夏羽、一義の額に描かれた種字に中指で触れて、目を閉じる。
そして、観音經の読誦を始める。

蒼夏羽「世尊妙相具、我今重問彼、佛子何因縁、名為観世音……」
隼人「…胡散臭せえ（つぶやく）」

蒼夏羽「…………我為汝略説、聞名及見身、心念不空過、能滅諸有苦…………」

一義の額の種字が、浮かびあがるように、かすかに、赤く輝きはじめる。

隼人「うそ…………」

場が、異様な雰囲気にも包まれる。

和恵・隼人「…………（緊張）」

蒼夏羽「…………或漂流巨海、龍魚諸鬼難、念彼觀音力、波浪不能没…………」

○ 同・病室、表

和恵が蒼夏羽を見送る。そばに綾乃もいる。

和恵「…あの、覚えてますよね、私がお願いしてたこと…」

蒼夏羽「ええ。あなたがでてくる夢を、旦那さんが見るようになって…」

和恵「ええそうです、そういうことです」

蒼夏羽「一つだけ訂正しておくけど…あなたが夢に現れること、それが旦那さんにとって
幸せな夢なら、願いどおり、そうなるでしょう。けど、そうじゃない場合は、その
ときは違ってくるから…（微笑んで）でも大丈夫、よね？」

和恵「…………」

○ 同・病室、中（時間経過）

一義が穏やかに安らいだ表情で眠っている。

その寝顔を見つめる、和恵と隼人。

隼人「確かに、顔つき変わった…………」

和恵の表情が、急に強ばる。

隼人「…母さん？」

和恵「…………あの女の夢を見てる…私じゃない。きっと、あの女の夢だ…………」

隼人「…………」

○ 街角（夕）

蒼夏羽と綾乃、並んで歩いている。

綾乃「おまえが見る今夜の夢、楽しみだなあ」

蒼夏羽「他人事だと思って。ブルー通り越して超ブラック。嫌な夢を見るってわかってるから。私って、避雷針だわ……」

綾乃「避雷針？」

蒼夏羽「だって悪夢が私に乗り移ってくるんだよ。前回夢違したときなんて三日三晩うなされた。タイタニックみたいなのが沈没する夢で苦しくて、私泳げないしさあ、泣いたね」

綾乃「でもよお、櫻井は長谷川が女を殺（や）ったと、そう思ってた。だったら長谷川の夢見りや何かわかるぜ」

蒼夏羽「それは……まあ、そうだけど……」

綾乃「感謝しろよ。オレと出会ってから、おまえの神通力が開花したんだ」

蒼夏羽「あのねえ、綾乃とは無関係だから。昔からあったの、このわけわかんない力。小さい頃からね、友だちが悪い夢見ると私も同じように見てた。で、なぜか友だちだけが解放される」

綾乃「なんだろうな、その力の由来」

蒼夏羽「幼い頃から毎朝お爺ちゃんと一緒に観音様の前でお経読んだから、たぶん、その御利益ね」

綾乃「御利益ねえ……」

蒼夏羽「お爺ちゃん言ってた。観音様はへいる〜って」

綾乃「オレ会ったことねえけど……」

蒼夏羽「今回は、なるべく記憶のカケラを集めるようにした」

綾乃「便利だねえ、夢違」

蒼夏羽「悪夢にもいろいろあるから。リアルなのから剣と魔法のファンタジーまで」

蒼夏羽、スマホを取りだして、電話をかける。

蒼夏羽「……あ、千石、終わったから、迎えに来てよ」

○ 車の中（蒼夏羽の夢／一義の悪夢が乗り移っている）

千石が運転し、後部座席には蒼夏羽がいる。

外の景色は、夜の湖畔である。

蒼夏羽、景色から車内へ視線を戻すと、隣に、いつの間にか一義がいる。

蒼夏羽「……」

運転する千石も、見知らぬ男に変わっている。
景色も一変、車は夜的高速道路を走っている。

一義「岡田君、飛ばし過ぎじゃないのか？」

男Ⅱ岡田祐介（31）、そう言われると、逆にぐっとアクセルを踏み込む。

一義「岡田君ッ！」

車速が、加速度的にあがる。

一義「やめろッ！ なにやってんだッ！」

岡田、振り返る。額には脂汗がでていて、（死を前に）表情が震えている。
岡田、急ハンドルを切る。

車、中央分離帯へ激突する。

一義・蒼夏羽「！（悲鳴）」

○ 金剛山観音寺・寝室（深夜・蒼夏羽の夢、おわり）

蒼夏羽、バツと目覚める。

蒼夏羽「……」

綾乃が壁をすり抜けて、入ってくる。

綾乃「どうよ？ 長谷川の悪夢は」

蒼夏羽「……彼を、殺（あや）めようとしたヤツがいるね」

○ 同・書院（日替わり）

蒼夏羽と、櫻井・和田が対面している。
そばに綾乃、出入口付近には千石が立っている。

和田「（蒼夏羽に）なんで故意の事故だと、そう言い切れるんですか」

櫻井「待て。オレら事故の状況なんて一切話してない。なのに見ていたかのように言い当てる」

蒼夏羽「……」

和田「超能力ですか？ バカバカしい」

綾乃「夢違じゃボケ」

櫻井「千里眼だけじゃない。蒼夏羽には、神通力があるんだ」

和田「だったらスプーンか何か、曲げてみせてください」

綾乃「（蒼夏羽に）こいつの首、曲げたれ」

櫻井「和田、言い過ぎだ」

和田「櫻井さんは、霊能者に取り憑かれてる芸能人と同じ類ですよ」

櫻井「ちよつと待て、オレまでコケにすんのかッ」

和田「僕は客観的な判断をしているんです」

蒼夏羽、歌謡曲「けんかをやめて」を歌いだす。かなり音程ハズレ。

蒼夏羽「喧嘩をやめてえゝ二人をとめてえゝ」

櫻井・和田・綾乃「？」

蒼夏羽「私のためにいゝ争わないでえゝ」

櫻井・和田・綾乃「……」

蒼夏羽「…場を和ませようと、私なりに努力してみたんだけど」

櫻井・和田・綾乃「……（完全に白ける）」

x

x

x

蒼夏羽「運転してた男について、警察はどれくらい調べた？」

櫻井「高速は管轄が違うから…」

蒼夏羽「キチンと調べて」

櫻井「名前ならわかるぞ、岡田祐介」

蒼夏羽「それ新聞に載ってる情報でしょ。もっと調べてよ。それと、長谷川建設の幹部が

何か隠してるみたい。うちの綾乃がそう言ってる」

和田「綾乃？」

櫻井「だから、地縛霊な」

綾乃「（櫻井に）ガチで殺すぞ」

櫻井「けどなあ、長谷川建設の幹部は口閉ざして何も喋らないんだ」

蒼夏羽「だったら：：そうね、私が長谷川の奥さんに直接当たってみるわ。実は奥さん、先
日うちへ来たから」

櫻井「え、なんで？」

蒼夏羽「私、普段占い師みたいなことやってるじゃない」

櫻井「相談に来たんだ？」

蒼夏羽「まあ、そんなところ」

和田、千石が気になって、

和田「：：あの人、無口ですね」

蒼夏羽「千石は、口がきけないから：：」

和田「そうなんですか：：」

蒼夏羽「もともとお爺ちゃんのお弟子さんで、なんていうか、幼馴染みみたいなものなん
だけど、料理も掃除も代わりにやってくれるしさ：：家政婦？」

綾乃「置いときゃ用心棒にもなる」

○ ××家・玄関（日替わり）

櫻井と和田が聞き込みしている。

老婆に、岡田の顔写真を見せている。

老婆「ええ僅かな期間ですが、うちのアパートに住んでいました」

○ ××アパート・×号室、前

聞き込みを続ける、櫻井と和田。

中年主婦が、隣の部屋を見つめて、

主婦「若い夫婦が入ってきた、って思ったら、すぐにガラの悪い人たちがやって来てね、
ドアに『カネ返せ』とか落書きされましたよ」

○ 高崎総合病院・一義の病室

和恵と蒼夏羽がいる。綾乃もいる。

和恵「先生がそう言われるなら：：まあ、そうなのかもしれませんね：：……」

蒼夏羽「信じてくれる？」

和恵「あれから夫の表情はすっかり変わりました。私は先生を信じます：：……ただ、あの、

夫が私の夢を見ていてくれるのかどうか、それだけが…」

蒼夏羽「……」

和恵「あ、ごめんなさい。私ヘンなことを……」

蒼夏羽「いえ…あの、さっきの話だけど、岡田を雇ったの、誰だかわかる？」

和恵「さあ会社のことは……」

蒼夏羽「調べてくれない？」

和恵「私が、ですか？」

蒼夏羽「真実を知りたいって思わないの？」

和恵「……」

蒼夏羽「（眠り続ける一義を見て）あんなふうにした人がいるんだよ。私なら、絶対許せないけど……」

和恵「……（どこか冴えない表情）」

○ エレベーターの中（日替わり）

櫻井と和田がいる。

和田「岡田がヤミ金に浸かってズブズブだったとは驚きですねえ」

櫻井「蒼夏羽の言うとおり、この事故には裏があるぞ」

○ ××マンション・絵里子の部屋、前

櫻井、呼び出しチャイムを押す。

岡田絵里子（27）が出てくる。

櫻井、警察手帳を見せる。

櫻井「岡田祐介について訊きたいんだけど……」

絵里子「……」

○ 同・絵里子の部屋

絵里子と、櫻井・和田が対面している。

和田「岡田は起業に失敗、莫大な借金を抱えた。そうですね？」

絵里子「……はい」

櫻井「ITベンチャー、全くわからん世界だ。オレ、エクセルもマトモに使えねえから」
和田「上場を目指してたようですね。元従業員から聞きましたよ」

絵里子「それが、何か？」

和田「堅気の金融機関が若者の妄想に付き合うとは思えません」

櫻井「ま、あんたの旦那は最初から喰いもんにされてたんだよ、裏社会の連中に」

絵里子「……」

和田「暴力団がらみの資金がベンチャーへ流れるのはよくある話です」

絵里子「……」

和田「岡田は暴力団とつるんで、奥さんに迷惑かけたくないから別れたんじゃないですか？（室内を見回して）アパートからマンションへ移ってきたところを見ると、借金の影は感じられませんし、いったい何があったんです？」

絵里子「……」

○ 総合体育館・外観（日替わり）

○ 同・柔道場

蒼夏羽と千石が対峙している。ともに黒帯である。

柔道を学ぶ生徒たちが二人を見つめている。

蒼夏羽、千石につかみかかるも、腕をとられて、一本背負いで返り討ちに。

瞬殺された蒼夏羽、天井を見つめる、と、綾乃が顔をのぞいてくる。

綾乃「相手が悪い」

蒼夏羽「強い女と弱い女、どっちがモテると思う？」

綾乃「おまえ、とくに婚期逃してるだろ」

蒼夏羽「まだまだあ（すつくと立ち上がる）」

○ 市民プール前の通り（夕）

蒼夏羽と綾乃が歩いている。そばに千石もいる。

改修工事である市民プールのそばを通りかかったとき、綾乃が、看板表示「建設業の許可票」商号欄に「村田技建株式会社」とあるのに気づき、ぴたっと立ち止まる。

蒼夏羽「どうした？」

綾乃「（商号「村田技建株式会社」を見つめて）……」

蒼夏羽「ん？」

綾乃「……思い出した。間違いない、ここだ、長谷川の連中が仕事とられたとか、確かそんなこと言ってたぞ……」

蒼夏羽、工事現場を見渡す。

蒼夏羽「…市民プールの、大がかりな改修ね」

綾乃「うちの常連でさ、迷える子羊が一匹役所にいたろ」

蒼夏羽「…いるねえ」

○ 高崎市役所・外観（日替わり）

○ 同・契約課

カウンターを挟み、木村係長（38）と蒼夏羽、綾乃が対面している。

蒼夏羽「婚活は順調？」

木村「10年破られなかった結婚相談所の連敗記録、見事に塗り替えてやりました」

綾乃「若ハゲは伊達じゃねえな」

木村「今も気になる人がいるにはいるんですが、もう、怖くてね…」

蒼夏羽「だったら千里眼で観てあげようか？ あんたがなんて思われてるか」

木村「おー（喜ぶ）」

○ 金剛山観音寺・書院、外観（夜）

○ 同・中（夜）

蒼夏羽、木村と対面している。

綾乃、そして千石もいる。

木村「今、うちは長谷川建設を指名停止にしています。暴力団と繋がってたからです」

蒼夏羽「長谷川建設は入札に参加できない、そういうことね？」

木村「ええ、受注した工事の下請けに企業舎弟を使ってたのがわかったんです」

蒼夏羽「企業舎弟って？」

木村「暴力団が関与している会社です。竜富産興って言います」

蒼夏羽「なぜわかったの？」

木村「業界内で内輪もめしたようですね。同じく長谷川建設の下請けだった村田技建が、

まあ、裏切って暴露したんですよ」

蒼夏羽「その暴力団の名前って、わかる？」

木村「藤堂組系の黒川会って聞いてますが…あの、そんなことより早く千里眼で占ってくださいよお」

蒼夏羽、綾乃の方を向いて、「よろしく」と目で合図する。

綾乃「よし、連敗記録を更新してやる」

○ 金剛山観音寺・書院（日替わり）

蒼夏羽・綾乃<の櫻井・和田が卓球している。綾乃の額には **ア** マークの入った御札が貼られている。

櫻井・和田の側からすると、御札とラケットだけが宙に浮いていて、ラリーに加わっているように見える。（※御札を貼ると、綾乃はモノをつかめるようになる。）
その不可思議な光景に、和田は困惑、ラケットを手にしたまま茫然としている。

櫻井「（ラリーしながら）岡田、借金ズブズブっ」

蒼夏羽「ズブズブか」

櫻井「金貸してたの、極道、黒川会ッ」

櫻井のスマッシュが炸裂する。

和田は宙に浮く御札を見つめたまま、

和田「……目眩がしてきました」

櫻井「目に見えてる現実は受け入れなさい」

和田「透明人間っすか？」

櫻井「キョンシー、あ、古るいか」

綾乃「もう何とでも言え……」

蒼夏羽「いくよッ（と、サブする）」

和田を除き、三人のラリーが始まる。

櫻井「岡田の借金、利子込み一億超え」

綾乃「終わるな、それ」

櫻井「岡田は命を売って償った、オレの直感推理ッ」

蒼夏羽「ホントなら酷い話。観音様の、おしおきじゃッ」

蒼夏羽のスマッシュが炸裂する。

櫻井、畳に転がる玉を拾いつつ、

櫻井「そっちの成果は？」

蒼夏羽「その黒川会だけど、長谷川建設と繋がってるみたいね」

櫻井「ああそれなら組対から聞いている」

蒼夏羽「組対？」

櫻井「組織犯罪対策課。マル暴」

綾乃「岡田、に金貸した黒川会、と繋がる長谷川建設か……」

櫻井「黒川会は岡田を脅し、利用して長谷川を始末しようとしたんだろう。鬼署長も認め

たオレの直感推理ッ（と言ってサブする）」

蒼夏羽「黒川会は長谷川と癒着って、今言ったじゃん」

櫻井「ズバリ間に何かあった？ 内輪もめ？」

蒼夏羽「ズバリの根拠は？」

櫻井「ズバリ」

蒼夏羽「……村田技建、調べない？」

櫻井「え、なんで？」

蒼夏羽「いいからッ！」

蒼夏羽のスマッシュが再び炸裂する。

櫻井「突っ立ってねえで和田も参加しろ。2対1じゃ不利だ。勝ったら蒼夏羽がすっぴん
見せてくれるって……おい？」

和田「……（くらくらしで卒倒する）」

櫻井「和田ッ！」

○ 村田技建・外觀（日替わり）

3 階程度の、中規模な社屋。

○ 同・応接室

村田兼三社長（58）と櫻井・和田が対面している。

事務員の黛仁美（55）が、お茶を出して、下がる。と、そのとき、仁美と櫻井の目
が意味ありげに合う。

櫻井「長谷川建設が勢いを失ってから好調らしいねえ。（お茶を飲んで）お茶まで違う。

高級茶葉だな、うん」

村田「クリーンな経営をしているだけです」

櫻井「社長だって黒川会とは繋がってたんじゃないの？」

村田「告発はいけないことですか？」

櫻井「ただ、暴排条例を受けて、おたくは黒川会とバツサリ縁切った。そうだよね？」

村田「まあ……」

櫻井「英断だ。長谷川建設には何故それができなかったんだろ？」

村田「簡単な話です。今のハセ建があるのは黒川会のおかげですから」

櫻井「そこ、聞かせて」

村田「会長の長谷川清志と、黒川会の先代会長・黒川徹は戦友だったんです。戦後の闇市では結構な荒稼ぎをしたようですね。出所が同じ穴なんですよ。黒川は潜ったまま暴力団組織に入り、長谷川はどうか日の元に出た。その違いだけで、ともにヤクザ者です」

和田「黒川会が関与したのは談合ですか？」

村田「違う違う。徹底的な工事妨害ですよ。だから結局仕事は黒川会とつるんだハセ建へ譲ることになる。で、うちは下請けにまわる」

櫻井「……話、変えてもいい？」

村田「どうぞ」

櫻井「長谷川一義は一時期この従業員だったよね。当時は高村一義だったけ？」

村田「よく調べてますね」

櫻井「長谷川建設へ引き抜かれたって聞いたんだけど？」

村田「引き抜かれた？ 誰から聞いたか知りませんが、それは違います。うちを裏切ったから、放り出したんですよ」

○ 工事現場（28年前）

現場の片隅で、一義（31）と和恵（28）が寄り添い、楽しそうに弁当を食べている。

村田の声「あいつはハセ建にいた女に手を出したんです。経理をやってた女で、今の奥さんですよ」

和恵、おかずを箸でつまみ、あーん、と一義の口元へ運ぶ。

その光景を、作業員らが遠巻きに冷ややかに見ている。

○ 村田技建・事務所（同年）

村田博史社長（61）の前で、一義が立たされている。

博史「高村、おまえハセ建の女につまらんこと喋ってんだろ。最近仕事が横取りされるようになった」

一義「誤解です…確かに交際は認めます。けど、仕事のことは一切喋ってません」
博史「うちの見積金額ばらしてるって、みんな言ってるぞ」

事務所の社員ら、露骨に白けた目を一義へ向ける。四面楚歌。

一義「……」

○ 村田技建・応接室（現在へ戻る）

村田「当時、ハセ建とうちはライバルでした。社長、私の父ですが、情報を漏らしていた高村を即刻クビにしましたね。当然ですよ」

櫻井・和田「……」

○ 喫茶店（夜）

櫻井と和田、二人で一つ、巨大なパフェをつつついている。
黛仁美が入ってくる。

櫻井「待ってたよ。村田技建の生き証人、生きてる化石、髪型アンモナイト」

仁美「ちょっと社長にべらべら喋らないでくれる。チクってるのが私ってバレバレ」

x

x

x

櫻井「長谷川なあ、解雇だったじゃないか」

仁美「だからあ、社長の言ってること鵜呑みにしたら駄目だって。一義さんに嫉妬してんだから（仁美も巨大パフェを豪快につつつく）」

櫻井「嫉妬？」

仁美「社長は高卒で一義さんは大卒。それはいいとして、一義さん、仕事できたからねえ、二枚目だし。先代の社長、今の社長のお父さんだけどね、息子が高村だったらって、口癖のように言ってたわけ。社長にとっては相当屈辱的だったと思うよ」

和田「長谷川がそんなにデキたなら、放り出さなきゃよかったのに……」

仁美「これは噂だけどね、ハセ建、自分トコの女つかって一義さんをはめたんじゃないかって、そんな説もあるのよ。実際、一義さん、うちにいらなくなったわけだし」

櫻井「美人局で長谷川潰し？」

和田「たかが一社員に対して、そこまで手の込んだ事します？」

仁美「あのねえ、今と違って当時のうちがハセ建と互角にやり合えたのって、全部一義さ

んのおかげだから…ハセ建の社長だって、子宝に恵まれなかったこともあって、義さんを養子にしちゃうし後継者にしちゃうし、で、会社さらに急成長するし…とにかく、すっごく商才あったんだから、一義さん」

櫻井「単に暴力団と癒着してただけだろ」

仁美「それも実力のうちよ」

和田「あの、長谷川建設の女って和恵さんのことですよ？ 結婚までいったわけでしょ。

普通の恋愛だったと見るべきじゃないですか？」

仁美「まあ、結果的には」

○ 長谷川一義邸・寝室（日替わり）

ベッドに仰向けに横になってる蒼夏羽の顔（頬）へ、和恵が業務用エステマシンから伸びたホースの先のハンドピース（ノズルのようなもの）を使って当てている。ぴっぴっとオレンジ色に光る（光フェイシャル）。そばに綾乃もいる。

蒼夏羽「エステティシヤンの資格までもってるなんて、超驚き」

和恵「根が凝り性なんで、とことんなんです」

蒼夏羽「ＡＢ型？」

和恵「よくわかりましたね。先生はＯ型？」

蒼夏羽「アタリ」

和恵「なんとなくわかります。ざっくばらんなところが…あ、悪い意味じゃなくて」

蒼夏羽「…そっぴや、岡田のこと何かわかった？」

和恵「うちが下請けでよく使う竜富産興にいたようです。うちの人事が拾ったって」

蒼夏羽「あれ？ 岡田はＩＴ企業を経営してたんじゃない？」

和恵「え、そうなんですか？」

蒼夏羽「岡田は暴力団から融資受けて起業し、失敗して借金に沈んだって、そう警察が言ってたから」

和恵「警察？ ちょっとごめんなさい、どういことですか？ 警察が、うちのこと調べてるんですか？」

蒼夏羽「……」

綾乃「失言したな」

和恵「先生、どういことですか。隠さないで言ってください」

蒼夏羽「……」

和恵、エステマシンの電源を切る。

和恵「…エステマシ、やっぱり譲れません」

蒼夏羽「途中でやめないで途中で」

和恵「これで結構シミがとれるんですよ」

蒼夏羽「……」

和恵「中古で買ったって、それなりにすると思います」

蒼夏羽「……わかったから……話す話す……ただそのかわり、竜富産興って言ったよね？

そこへ私を連れてってよ」

和恵「え……何で、ですか？（表情が曇る）」

○ 雑居ビル・前（日替わり）

2階の窓に「竜富産興(株)」の広告文字。

○ 竜富産興・事務所

ガラの悪い男たちが煙草を吸いながらデスクに腰をおろしている。
ドア開き、和恵と蒼夏羽、その後ろから綾乃が続いて入ってくる。
男たち、一斉に蒼夏羽を睨みつける、ガンを飛ばす。

綾乃「偏差値低そな連中……」

和恵の姿を見て、野原勲(ふみ)が歩み出る。

野原「これはこれは……」

×

×

×

蒼夏羽・和恵と野原が向かい合う応接テーブルを、男たちが囲んでいる。

綾乃もそばにいて、立っている。

野原「ああ確かに岡田はうちにいたが、使えねえヤツでよ、即クビだわ」

蒼夏羽「その後で、長谷川建設が雇ったんですね。仲介したの、社長？」

野原「当時は女房抱えて不憫だったから、話をつけてやった」

蒼夏羽「話をつけた？ 誰とです？」

野原「会長」

蒼夏羽「会長？」

野原「長谷川建設の会長、清志さんね」

蒼夏羽「岡田は借金を抱えてたようですが…」

野原「それは知らん」

蒼夏羽「暴力団からお金を借りてたって」

野原「あのさあ、あんた岡田の愛人？」

蒼夏羽「え、違いますけど…」

野原「だったらさあ、岡田のことなんか調べてどうすんの？」

蒼夏羽「…はつきり言いますか」

蒼夏羽、鋭い眼差しを野原に向けて、

蒼夏羽「私は岡田が事故を偽装し、長谷川社長を殺（あや）めようとした、そう思ってる

んですよ。それも、某暴力団に脅されてね」

綾乃「言っちゃった…」

蒼夏羽「名探偵・神楽坂の神通力推理。パーフェクトじゃない？」

野原「はあああ？ あんたな、見たんかッ！」

蒼夏羽「見ました」

野原「ナメとんかッ！」

野原、テーブルをどんと握り拳で叩く。

周りの男たちが、蒼夏羽を睨みつける。

和恵「（たしなめて）野原さん…」

野原「…うちと黒川会の関係知ってて、おまえ言っとんのかッ」

蒼夏羽「そうですよ」

野原「（笑って）馬鹿にされたもんだ、笑えてくる…奥さん、帰ってもらえます？ かっ
なり気分悪いんで」

和恵「…」めんなさい……………」

蒼夏羽、和恵より先に席を立つ。

蒼夏羽「後はこっちで調べます。私には、警察の知り合いがいますので…」

蒼夏羽、颯爽と事務所から出ていく。

和恵、野原に頭を下げてから、慌てて蒼夏羽の後を追う。

野原「……」

赤堀和紀（27）、野原に寄る。

赤堀「どうします？」

野原「あんな女、身ぐるみはがして黙らせろ」

赤堀「追いますか？」

野原「…待て。まずは相手が何者か、調べてからにしろ」

綾乃が、去らずに残っていて、

綾乃「一触即発だ（わくわく）。ヒトの世界は争いばかりで退屈しねえな」

○ 金剛山観音寺・参道（深夜）

周囲には灯り一つなく、真っ暗闇である。

○ 同・南門前（深夜）

暗闇に紛れて、赤堀が先頭で案内し、大貫常広（35）率いる暴力団・黒川会の構成員数名が境内へ侵入していく。

○ 同・書院、表（深夜）

赤堀、引き戸の鍵をバールでこじ開けて破壊し、扉を開ける。

大貫ら構成員、中へ入っていく。

○ 同・書院（深夜）

真っ暗な中、正面、千石が仁王立ちしている。

その隣に、蒼夏羽の姿もある。

大貫ら、二人と鉢合わせてしまい、

大貫「……」

蒼夏羽「来るの、わかってたから」

大貫、構成員へ「やってしまえ」と手で合図する。

蒼夏羽、後方へ（千石の背後へ）下がる。

構成員、真正面の千石へ殴りかかる。

千石、構成員Aを内股で転倒させる、と、続く赤堀の腕をとって一本背負い、畳に激しく打ちつける。

構成員BとC、思わずたじろいでしまう。

大貫「何をしてるッ！」

大貫にけしかけられ、構成員BとC、ナイフを出し、千石を襲う。
倒れていた構成員Aと赤堀が、千石の足に抱きつく。

千石、動けず、構成員Cのナイフが千石の上腕に深く刺さって流血。
千石、片膝ついて崩れる。

と、襖が開いて灯りがつき、櫻井と和田、警察手帳を手にして出る。

櫻井「警察だ。そこまでにしろ！」

構成員ら、大貫へ振り返り、指示を仰ぐ。

大貫、顎で「やれ」と命令。

櫻井・和田、立ち上がった千石、構成員らと再び乱闘になる。
御札が、空中をひらひら浮遊している。綾乃である。

状況を見つめる大貫、しびれを切らし、拳銃を懷から抜いて、

大貫「動くな！（と威嚇）」

櫻井・和田ら、両手を挙げて動きを止め、降参のポーズ。一方で、御札の動きをじっと見つめている。

綾乃、大貫の背後にある花瓶を持ち上げる。花瓶が、移動する。

大貫「退くぞッ」

構成員ら、櫻井たちから離れていく。

と、そのとき、綾乃が大貫の後頭部へガッツンと花瓶を叩きつける、割れる。
大貫、恐ろしい形相で振り返る、が、そのまま卒倒してしまう。

構成員たち「大貫さんッ！」

○ 同・南門前（深夜）

複数台のパトカーが停車している。

櫻井と和田、手錠をかけた構成員たちをパトカーへ放り込んでいく。
救急車が来ている。担架に、千石の姿がある。

○ 同・書院（深夜）

気を失った大貫が畳の上で横たわっている。

蒼夏羽、大貫の額に種字（梵字）を素早く筆で朱書きしていく。

そばに、綾乃がいる。

綾乃「さつさとやれ。時間がない」

蒼夏羽「……」

綾乃「……あ、千石なら心配すんな。あいつはヤワじゃない」

蒼夏羽「……そうね。（千石を心配する気持ちを振り払い）……南無観世音菩薩ッ」

蒼夏羽、両手で印を結び、続いて、大貫の額に描かれた種字に中指を添える。

そして、ゆっくりと観音經の読誦をはじめめる。

蒼夏羽「夢違をはじめます……世尊妙相具、我今重問彼、佛子何因縁、名為観世音……」

大貫の額の種字が、浮かびあがるように輝きはじめる。

綾乃「……（見守る）」

蒼夏羽「……或漂流巨海、龍魚諸鬼難、念彼観音力、波浪不能没……」

○ 白鷺マンション・聡美の部屋（事件当日・蒼夏羽の夢／大貫の夢が乗り移った）

ベランダが開いており、涼しげな風がカーテンを揺らす。

身重の奥寺聡美、膨らんだお腹（※妊娠6ヶ月）を優しく撫でながら、子守歌をくちずさんでいる（それは流行歌である）。

そばに、蒼夏羽が立っている。

蒼夏羽「（辺りを見回して）……」

玄関の鍵がガチャッと開けられる。

聡美、「誰？」と不審に思い、立ち上がり、玄関へ。

と、ドアが開けられて、ニット帽を被りサングラスをした大貫と黒川会の若頭・佐

伯貴明（ち）が室内へ入ってくる。

佐伯「奥寺聡美さん、だよねえ」

聡美「（恐怖で声が出ない）……」

佐伯、聡美に寄って手首を鷲づかみにする。

聡美「いやッ！」

聡美、佐伯の手を振り払う、と、勢いで佐伯の顔に当たり、サングラスが落ちる。

佐伯の顔がわかる。その顔を、蒼夏羽が凝視する。

聡美、奥へ逃げる。大貫、追う。

佐伯、サングラスを拾って、かける。

聡美「なんなんですかッ！」

大貫「あんたの愛しい人がねえ、ちょっと暴れ過ぎなんだよ」

大貫、振り向いて、佐伯の指示を確認する。

佐伯、顎で「やれ」と促す。

大貫、聡美につかみかかろうとする。

聡美「来ないでッ」

大貫、聡美の上腕をつかんで押し倒す。

そして、馬乗りになる。

大貫「今日のところは、こいつの命をもらっていくだけだ」

大貫、聡美の膨らんだお腹を殴る。

聡美「いやああああ……」

大貫、ケラケラ笑いながら、聡美の腹を殴る、何発も。

聡美「ああああああ……」

聡美、泣きながら声にならない悲鳴をあげ続ける。完全に流産しただろう。

蒼夏羽「…………（一部始終を見つめる）」

×

×

×

聡美、独り仰向けに横たわって放心している。目がうつろ、生気がない。

○ 金剛山観音寺・寝室（翌朝・夢、おわり）

蒼夏羽、目覚めると、そばに綾乃がいる。

綾乃「どうだった？」

蒼夏羽「…………スイッチが入った。バチバチッて」

○ 高崎警察署・外観

○ 同・取調室

櫻井と和田、蒼夏羽、綾乃がいる。

蒼夏羽、きよろきよろしている。

和田「どうしました？」

蒼夏羽「はじめてナマで見るから」

和田「応接がふさがってて」

蒼夏羽「カツ丼ちよーだい」

和田「でませんよ。勘違いしてる人、多いですね」

和田、写真のリストを見せて、

和田「黒川会の構成員です。現時点でわかっている範囲ですが」

蒼夏羽「（見ながら）…違うね……………んー、違う……………「いつじゃない……………」」

蒼夏羽の手が、止まる。

和田「…………黒川会の若頭、佐伯貴明です」

蒼夏羽「こいつよ……こいつが奥寺聡美の部屋に入ってる。昨夜うちを襲ってきた男との、二人組でさ」

和田「（櫻井に）信じます？」

櫻井「オレはハナから入信してる、蒼夏羽教に」

和田「どうも非科学的なことは……」

櫻井「昨夜のことだって、蒼夏羽は当てたる」

和田「それは……」

綾乃「オレのおかげね」

櫻井「（蒼夏羽に）つまり、聡美をベランダから突き落としたのは佐伯貴明、そういうこといいな？」

蒼夏羽「ちよつと勝手に話つくくんないで。やつらが殺（あや）めたのは奥寺聡美じゃなくって、彼女の、赤ちゃんなんだから」

櫻井「赤ちゃん？」

蒼夏羽「お腹の中の赤ちゃんを、殺めたの」

櫻井「違うだろ。赤ちゃんじゃない。聡美が殺されたんだ」

蒼夏羽「それこそ違う」

櫻井「じゃ誰が聡美を殺したんだッ」

和田「あれ、蒼夏羽教に入信してるんじゃない？」

櫻井「うるせえよ」

和田「（蒼夏羽に）ちよつと、これ見てもらえますか？」

和田、マンシヨンの監視カメラがとらえた二人組の男（ニット帽を被り、サンングラスをかけている）の写真を見せて、

和田「監視カメラがとらえていた映像です。ただし奥寺聡美が転落死する、その2時間前ですが……櫻井さんが怪しいって言うんです」

蒼夏羽「佐伯で間違いないよ」

和田「わかりました。顔を隠してますが、三次元顔画像識別で照合してみます」

蒼夏羽「あのさ、まずは黒幕をつきとめようよ」

櫻井・和田「黒幕？」

蒼夏羽「だってそうでしょ、誰かが命令して襲わせたに決まってるんだから」

櫻井「つまり黒川会か……」

和田「あるいは黒川会のバックに誰がいるのかわかりません。長谷川建設も、しつこく当たってみる必要がありますね」

○ 長谷川建設・外観（日替わり）

○ 同・応接室

高尾副社長・板倉専務と、和田・蒼夏羽が対面している。綾乃もそばにいる。

高尾「ホント勘弁してください。何の権限があって私どもにつきまわれるんです？」

和田「……（言葉に窮する）」

蒼夏羽「黒川会の構成員が奥寺さんの部屋に侵入、暴行を加えた疑いがあるんです……」

高尾「……誰ですか、あなたは？」

蒼夏羽「金剛山観音寺、噂の美人住職、神楽坂蒼夏羽。タウン誌の表紙を何度か飾ってるんだけど……存知らない？」

高尾「は？」

蒼夏羽、名刺？を高尾に渡す。

高尾「（名刺？を見て）インドエステ菩提樹？ポイントカード？」

蒼夏羽「（回収して）ごめんなさい、間違えました」

和田「単刀直入に言います。奥寺聡美は黒川会から何らかの脅迫を受けていた可能性があるんですよ」

高尾「うちには関係ないでしょう」

和田「ありますよ。彼女は長谷川前社長の交際相手でしたから。加えてあなた方と黒川会とは無縁の仲ではないでしょう」

高尾「うちと黒川会の関係を疑ってるんですか？ とつくに切れてますよ（ウソをつく）」

板倉、終始うつむいたままである。

和田「（不審に思い）専務さん」

板倉「……」

和田「板倉専務さん」

板倉「あ、はい？」

和田「専務さんはどう思ってますか？ 前社長の事故と、奥寺聡美の転落死について」
板倉「……」

x

x

x

フラッシュ。

早野「専務のこと、みんな陰で何て言ってると思いますか？ ……日和見マンです」

×

×

×

板倉「……………（浮かない顔）」

蒼夏羽「ねえ、いつまで日和見マンやってるつもり？（微笑む）」

板倉「！（どうしてそれを？）」

綾乃が、ニヤつく。

○ 同・廊下（時間経過）

早野ら社員が三人、壁に両手をつき、金属バットを持った隼人へ尻を向けている。

板倉、通りかかる。

隼人「ジーターっ、ジーターっ、デレク・ジーターっ！（と、順番にケツバットする）」

バットで打たれた早野、一瞬にしてキレて、隼人につかみかかる。

早野「ふざけんなテメえ」

隼人「（冷めた目で）……クビにするぞ」

早野「……………」

板倉、見て見ないふり。

早野「専務ッ！（なんとかしてください）」

板倉、呼び止められて、仕方なく隼人の方へ寄る。

板倉「あの、社員を殴ったり叩くのは……………」

隼人「おまえもたてつくの？」

板倉「いや、そうではなく……………」

隼人「爺ちゃんに言いつけて、おまえもクビにするぞ」

板倉「……………（うつむいてしまう）」

○ 同・湯沸室

板倉、和田の名刺を見つめている。

板倉「…………日和見マンか……」

○ 高崎署・取調室（夜）

櫻井が大貫を取り調べしている。

大貫、そっぽ向いて横柄な態度である。

櫻井「…………（イライラ）」

大貫「…………（口を割る気なし）」

○ 同・表（夜）

和田が署に戻ってくる。

入れ替わるように、櫻井が出てくる。

和田「あ、櫻井さん。大貫、何か吐きました？」

櫻井「駄目だ駄目だ全然駄目。諦めて送検する」

和田「朝までまだ時間があるでしょう」

櫻井「いいから。それより、ちょっと付き合えよ」

○ オフィスビル・エレベーターの中（夜）

櫻井と和田がいる。

和田「いきなり本丸攻めですか……」

櫻井「いや、取引をするんだ」

和田「？」

○ 同・黒川会の事務所（夜）

櫻井・和田、エレベーターから降りると、すぐ正面が事務所の出入口になっており、構成員が二人、門番のごとく立ち塞がっている。

櫻井、警察手帳を見せて、

櫻井「高崎署の櫻井だ。会長さん、いるよね？」

×

×

×

応接室で、黒川克英会長（㉔）と、櫻井・和田が対面している。
黒川のすぐ脇に、佐伯貴明が立っている。

黒川「いろいろ嗅ぎまわってるようだが？」

櫻井「おたくの大貫を住居侵入でパクってます」

黒川「あいつが勝手にしたんだろ。わしは知らん」

櫻井「いずれわかりますけどね」

黒川「喧嘩を売りに来たのか」

櫻井「いいえ取引をしに来たんです」

黒川「取引？」

櫻井「現時点で調べがついてることを率直に言います。8月5日午後2時頃、おたくの佐伯と大貫両名が奥寺聡美のマンションへ侵入、暴行を加え、お腹の中の胎児を殺しています。その2時間後、女はマンションから転落死しました」

黒川「（佐伯へ）おまえ、やったんか？」

佐伯「記憶にありません」

黒川「だとよ」

櫻井「マンションの監視カメラが二人の姿をとらえています。本部の科捜研が画像認識で一致を確認済みです」

佐伯「……」

黒川「その女のトコへ行ったとは限らんだろう」

櫻井「室内に落ちていた毛髪が、DNA鑑定で、大貫のものと一致してます（と、ウソをつく）」

和田「……（え？ 櫻井を見る）」

櫻井「いくら帽子を被っても、ガイシャと揉み合えば毛髪の本や二本、落ちますよ」

黒川「……」

櫻井「岡田祐介を知ってますね？ 長谷川建設前社長、長谷川一義のお抱え運転手です」

黒川「いや、知らん」

櫻井「岡田はおたくから結構な額の借金をしています。知らないことないでしょう」

黒川「何が言いたい？」

櫻井「長谷川の事故は奥寺聡美の転落死、その5日後です。女は長谷川の愛人だった。一つの見立てとして、会長、あなたはまず女を暴行することで長谷川に何らかの圧力をかけた。それでも警告を無視する長谷川を、あなたは岡田を使い、始末することにしたんだ」

黒川「警告？ 何の警告だ。意味がわからん」

櫻井「たとえば暴排条例ですよ。長谷川建設はもともおたくと良好な関係にあった。当の長谷川本人も、おたくから随分と恩恵を受けてきたことでしょう。それが暴排条例ができるや否や、手の平返して縁切りを迫ってきた、違いますか？」

黒川「そんなことで殺るなら、いったい何人殺らんといかんのだ。片手じゃ足りんな」

櫻井「怒らないでくださいよ。今日は取引しに來ただけって言ったでしょ」

黒川「……言ってみろ」

櫻井「（佐伯を一瞥して）出してくださいよ」

佐伯「……」

黒川「奥寺聡美、だったか。その女の件は自殺でカタついたんじゃないのか？」

櫻井「よくご存じで。ただ、少なくともおたくの大貫が室内へ入ってることがわかった以上、捜査は再開されるでしょうねえ。事故についても、もう一度調べるつもりですが……下手すると会長、あんたにまで害が及ぶかもしれない……」

黒川「……」

櫻井、佐伯を横目で見ながら、

櫻井「とりあえず出してくださいよ。それで、手打ちにしませんか？」

和田「……（え？ 櫻井を見る）」

櫻井「組対の方は会長、あんたをムシヨに放り込みたくて日々うずうずしてンです」

黒川「……（佐伯の方を見る）」

佐伯、無言でうなづく。

黒川「……わかった。少し時間をくれ。前向きに考えよう」

○ 公園（夜）

ベンチに、櫻井と和田がいる。

和田「心變わりの理由は何ですか？」

櫻井「何が？」

和田「黒川会の連中が奥寺聡美の部屋へ入ってるんですよ。黒幕候補筆頭は会長でしょ」

櫻井「仕方ねえだろ。現時点でヤツを捕れる材料がないんだ」

和田「……トカゲの尻尾が手に入るだけ、ってことですか？」

櫻井「このままだと連中を観音寺の侵入罪でパクれるだけ。おまえの好きな客観的判断を

すればそうなる、違うか？」

和田「とりあえず佐伯を捕れるだけでも成果、ということですね？」

櫻井「若頭を捕るんだ、黒川会の弱体化には繋がる」

和田「櫻井さんがそれでいいって言うなら何も言いませんけど……ただ、佐伯が出頭するとは限りませんよ。奥寺さんへの暴行を自供すれば、黒川会と長谷川建設との癒着もあることですし、捜査の手が本丸まで及ぶかもって……」

櫻井「実は既に組対と話ができてる。佐伯は暴行で捕るよ」

和田「そうだったんですか……」

櫻井「ただ、いずれにせよ黒川会はオレがいつか潰す。聡美の仇を逃すつもりはない」

和田「でも、それこそ組対の管轄でしょうが」

櫻井「なんでおまえいつも冷静なの」

和田「褒め言葉として受け取っておきます……」

和田のスマホが、鳴る。

和田「（電話にでて）はい、もしもし……」

和田、スマホの通話マイクをいったん手で塞いで、

和田「専務からです、長谷川建設の」

櫻井「？」

○ 板倉家・外観（日替わり）

住宅街の、一戸建て。

○ 同・リビング（日替わり）

板倉と、櫻井・和田が対面している。

和田「……ホントは社長と奥寺さんの交際を知っていた、そうですね？」

板倉「はい。奥寺さんが自殺したと聞いて」

櫻井「（遮って）自殺じゃない」

和田「（制して）櫻井さん……（板倉に）続けてください」

板倉「奥寺さんは、身を引いたんだと思います……」

和田「どういうことですか？」

板倉「一義さんは、奥寺さんの身籠もった子が男の子だとわかったと、将来的には自分の跡

に据えたいと、急に言い出すようになりました…」

和田「愛人の子を？」

板倉「ええ、その間子飼いの部下で社長を繋いで、最終的には…と」

○ 白鷺マンション・表（深夜・一年前）

長谷川一義（58）、玄関から出てくる。

板倉の声「一義さんは息子に刺されたことがあるんですよ。信じがたいでしょうが事実です。奥寺さんのマンションへ通っていたところを、待ち伏せされて…」

物陰に隠れていた隼人（24）が姿を現して、ナイフで一義の腹部を刺す。

一義「…………隼人」

一義、刺さったナイフを握りしめて離さない。手の平から血がしたたり落ちる。

隼人「あ、ああああ…………」

隼人、気が動転して、慌てて逃げ去る。

板倉の声「息子に社長の椅子を譲りたくなかった気持ちにはわかります。親子関係は完全に壊れていました」

○ 板倉家・リビング（夜・現在）

和田「父親の浮気が許せなかったんですか？」

板倉「だと思えます。一義さんは若い頃から仕事に明け暮れて、出産にも立ち会わなかったくらいで…何て言いますが、息子はそれこそ母子家庭に近いような環境で育っていました」

和田「母子密着ですね」

板倉「一義さんの奥さん、和恵さんですが、普段は普通なんです。昔から情緒不安定なところがあって、浮気を知るとおかしくり、何度か自殺未遂をしています。そのこともあったと思います」

櫻井「最悪だな長谷川。更にムカついた」

板倉「一義さんの息子は会長の清志さんからすると可愛い孫でして、まさに溺愛でした。」

家庭内の軋轢は会社の中にまで持ち込まれ、社内は会長の側につき、将来の社長候補を孫に見ている会長派と、そうではない社長派との真つ二つに分裂しました」

櫻井「お家騒動か……」

板倉「ええ……そのお家騒動に、奥寺さんは巻き込まれたんですよ」

○ 喫茶店・中（数ヶ月前・板倉の回想）

板倉と、身重（※妊娠3ヶ月）の聡美が会っている。

聡美「私はただ、この子を産みたいだけなんです。会社を乗っ取ろうとか、そんなこと全く頭にありませんから」

板倉「あなたにその気がなくとも、周りがどう見ますか……」

聡美「まだ産まれてもいないんですよ。社長になるとか、何年先の話をしてるんですかッ」
板倉「肝心なのは事実です。現に社長があなたという存在に振り回されているという事実、そして私も幹部も、いいえ会社が巻き込まれて、振り回されているという事実、それを私は問題視しているんです」

聡美「何を言われたって、私の気持ちは変わりませんから」

板倉「このとおりです（頭を下げる）」

聡美「……」

板倉「これだけは信じてください。私は会長派でも社長派でもありません。口の悪い連中はこんな私を日和見主義と揶揄しますが、私はただ、会社のことを第一に考えているだけです。このままだと、うちは空中分解してしまいます……」

聡美「だからって、どうしてこの子の命が犠牲にならなきゃいけないんですかッ！」

板倉「……法律では、中絶のリミットは22週だそうですね。だから、それまでに……」

聡美、立ちあがり、板倉の頬をひっぱたく。

聡美「……（板倉を睨みつける）」

○ 板倉家・リビング（夜・現在）

板倉「奥寺さんが妊娠しなければ、ここまで大袈裟なことにはならなかったと思います。社長の火遊びも時間とともに消えたでしょう」

櫻井「おい待て。聡美は何も悪くない。悪いのは長谷川の方だろがッ（身を乗り出す）」
板倉「……」

和田「専務は、奥寺聡美の自殺がお家騒動に巻き込まれたものと、そう理解してるんです

ね？」

櫻井「だから自殺じゃねえッて」

和田「櫻井さん……」

板倉「関係してると思いますが……だから私は奥寺さんが自ら死んで身を引いたんじゃないかって、そう思っているんです」

櫻井「てめえいいかげんにしろよッ」

和田「（止めて）櫻井さんッ」

板倉「一義さんと会長は以前から折り合いが悪くて、ただでさえ内輪もめが続いていたんです。そこへきて家庭内のゴタゴタに、派閥争いです。奥寺さんがもし本当に一義さんのことを想っていたなら、身を引くのが正しい選択だったに違いません」

櫻井「てめえのようなヤツがいるから、聡美はなあ（つかみかかる）」

和田「やめてください（櫻井を必死に止める）」

和田、櫻井を押さえつけながら、

和田「……今、社長と会長が対立してたって？」

板倉「ええまあ……たとえば最近だと、こんなこと言っているのかどうかわかりませんが、いわゆる暴排条例のからみで、黒い交際は絶とうとする社長と、そんなことを考えてもない会長とが平行線でしたね。とにかく何かと対立してました」

櫻井「ちよっと待て。暴排条例って……長谷川は黒川会から離れようとしてたんだな？」

板倉「ええそうです。もちろんその点については私も賛成でしたが」

櫻井「（少し落ち着き、和田に）俺の直感どおりじゃないか、完全にはまったぞ。長谷川の事故、あれは黒川会と縁切りしようとしたが故の報復だったんだ」

和田「可能性の一つとしてはアリですね」

板倉「ちよっと待ってください、それは早計だと思います。事故って、一義さんの事故ですよ？ あれが人為的なものだったかどうか、そんなの私にはわかりません。ただ、仮に人為的なものだったとして、それが黒川会による報復だとはとても思えません」

櫻井「なぜそう言い切れる？」

板倉「黒川会が、独断でそこまでするとは……」

櫻井「あいつらなら、やりかねん」

和田「いえ、櫻井さん……一理ありますよ。社長とはいえ長谷川独りが手の平返したって、黒川会との長年にわたる関係が直ちに切れるわけじゃない。つまり、そこまで短絡的に勇み足する必要がないんですよ、ね？」

板倉「ええ、そういうことです……」

櫻井「（板倉に）あんたさあ、ホントは何か知ってんじゃねえの？」
板倉「……」

櫻井「何か隠してんだろッ（再び板倉につかみかかる）」

和田「櫻井さんッ」

櫻井「（襟元を締め上げて）言え、言えよッ、知ってること全部ッ！」

板倉「……おそろく、会長が……」

櫻井「会長……？（手を放す）」

板倉「……事故が偶然でないとすれば、会長が関与してたのかもしれませんが（うつむいて、目を逸らす）」

和田「……専務、ありがとうございます。それを私たちに伝えたかったですね？」
板倉「会長も、あの孫も、黒川会も、すべて会社を喰い潰すガン細胞ですよ……」

○ 高崎総合病院・病室（夜）

和恵、穏やかに眠る一義の寝顔をじっと見つめている。

和恵「……やっと私のところへ帰ってきたと、そう思ってたのに……」

和恵、無意識のうちに手が動いていて、一義の首にそっと両手で触れる。

和恵「まだあの女のことを、考えてる……」

一義がうめく。表情が苦しそう。

和恵、ハッ和我に返る。

知らぬ間に一義の首を締めはじめていた自分自身の行動に気づき、手を放す、崩れるようにその場にへたり込む。

和恵「……（放心）」

○ 長谷川清志邸・外観（日替わり）

豪邸である。

○ 同・庭

長谷川清志（79）、池の錦鯉に餌をやっている。
櫻井と和田が来ている。

櫻井「会長さん、うまく事故を演出しましたね？　このまま逃げ切れると思ってます？」
清志「…何の話だ？」

櫻井「よそからヘッドハンティング、で、養子にまでしたってのに、随分と酷い仕打ちじゃないですか？」

清志「言ってる意味がわからない」

櫻井「例の事故資料、今調べてるんですよ。不自然な急ハンドルきってね…タイヤの痕からわかるわけ」

和田「運転手の岡田は、会長が雇ったようですね？」

清志「事故事故って、あの事故のことを言ってるんだろが…あのな、血は繋がってなくとも、一義は私の息子だ。息子を失った私の悲しみなど、君らにはわからんだろう」

和田「本当のことを言ってください」

清志「だから何の話だと言ってる。私は心臓を患っていてね、先は長くないだろう。会社の事は全で一義に託すつもりでいた。事故は心底残念でならない」

櫻井「御託は聞きたくないですね…裏で糸引いてんの、会長さんなんでしょ？」

清志「何か勘違いしてるようだが…私を疑ってるなら、心外だな」

櫻井「（和田と目を合わせてから）…：…まあいいさ、また出直します」

清志「…：…うちの敷居を跨ぎたければ、次は令状を持ってきなさい」

櫻井「そうさせてもらいます」

清志「（櫻井の背中へ）まず無理だろうがね（笑う）」

○ 同・表

櫻井と和田、清志邸の門構えを出たところ。

和田「老獺さが顔にでてますね」

櫻井「…令状無理だよ、証拠ねえもん」

和田「実はシロって可能性もありますが」

櫻井「ないない。オレの直感がMAX反応してっから」

○ 高崎総合病院・一義の病室（夕）

一義のベッドにもたれかかるようにして眠っていた和恵が、ふいに目覚める。

和恵、乱れ髪を両手で掻きながら、

和恵「ああああ…私の夢にまで、あの女が…：…」

和恵、立ち上がろうとして躓いて、前のめりに倒れる。

和恵、そのまま床で頭を抱えてうずくまり、感情が乱れて突然泣きだす。

和恵「入ってこないで…入ってこないでよ……」

○ 街角（夜）

雨が降っている。土砂降り。

和恵が、放心状態で傘もささず、ふらふら歩いている。

通行人たち、その姿を訝しげに見る。

和恵「……（何かをぶつぶつぶやいている）」

○ 白鷺マンション・x号室（夜）

櫻井とマンションの管理人（男・高齢）がいる。

室内には何もなく、がらんとしている（入居前）。

管理人「自殺者がでると、次の借り手には言っておかないといけないですよ」

櫻井「……」

管理人「おかげでこのとおり、さっぱり……」

櫻井、ベランダへでる。管理人も続く。

櫻井、眼下を見下ろし、事故現場を見る。続いて、周囲の景色を見渡して、

櫻井「……」

○ 同（数ヶ月前・櫻井の回想）

夜。ベランダで、櫻井と身重の聡美がフルートグラス（シャンパン）片手に街の夜景を眺めている。

櫻井「…本当に、独りぼっちで生きてくのか？」

聡美「独りじゃないよ、（妊娠4ヶ月のお腹を触って）二人だよ。二人ぼっち（微笑む）」

櫻井「……」

聡美「ねえもう少ししたら、実家に帰ることにしたから…出産にあわせて」

櫻井「そっか…しばらく会えなくなるな」

聡美「それでね…そのままもう、この街には戻ってこないかもしれない……」

櫻井「どういふこと？」

聡美「私の存在が、あの人の人生を狂わせてるって…そう言われてね…それからずっと悩んで…ああそうなのかもしれないあって…」

櫻井「誰に言われた？ 親父か？」

聡美「……」

櫻井「気にすんなよ。おまえは何も悪くない」

聡美「（夜景を見つめて）……どこにもある幸せが欲しいだけなのに…なんだか、遠いね……」

櫻井「……」

聡美「母になるってね、不思議な感覚だよ。スイッチが切り替わるの。（お腹を撫でて）この子さえいれば生きていける…ううん、違うな、この子のために私は生きていきたいって、本気で、本気でそう思えるんだから（微笑む）」

櫻井「……」

聡美「私ね、この子さえいればいい、他にはもう、何も望まない…」

○ 金剛山観音寺・南門（深夜）

和恵がうつぶせに倒れて意識を失っている。

激しい雨が、和恵のカラダを打つ。

傘を差した千石（ギブスをつけている）が歩み寄り、和恵を見つけて、

千石「……」

○ 同・書院（翌朝）

和恵が布団に寝かされている。

蒼夏羽、綾乃、千石が様子を見ている。

和恵、ゆっくり目覚めると、上体を起こす。

和恵、そこに蒼夏羽の姿を見つけると、我を失いしがみついて、

和恵「…先生助けて…私の頭から、あの女を消してッ……」

蒼夏羽「……」

和恵「夢にでてくるの…夢に……」

綾乃「おい、壊れてンぞ」

蒼夏羽「落ち着いて、何があったの？」

和恵「頭の中にあの女が入ってくる…笑ってる…私を見て…」

蒼夏羽「……」

和恵、蒼夏羽の手を握って、

和恵「あの女を消してッ、消してよッ！（錯乱気味）」

蒼夏羽「……………」

×

×

×

和恵が目を閉じ横になっている（寝かされている、眠ってはいない）。

蒼夏羽、和恵の額に筆で種字（梵字）

㊦

を朱書きしていく。

綾乃「とんでもねえ悪夢でそうだ……」

蒼夏羽「けど、これでピースが揃った」

綾乃「パズルが解ける、か」

蒼夏羽「（観世音菩薩印を結んでから）南無観世音菩薩……夢違をはじめます」

蒼夏羽、和恵の額に指をあてて、観音經の読誦をはじめめる。

蒼夏羽「世尊妙相具、我今重問彼、佛子何因縁、名為観世音……………」

和恵の額の種字が、うつすらと輝きはじめる。

和恵の瞼から涙がにじむように溢れてきて、流れて、頬に一条の線をつくる。

綾乃「泣いてる……………」

蒼夏羽「……………或漂流巨海、龍魚諸鬼難、念彼観音力、波浪不能没……………」

○ 長谷川一義邸・リビングキッチン（タ・2年前・蒼夏羽の夢／和恵の夢が乗り移った）

和恵（54）、豪華な料理を準備しながら配膳している。

隼人（23）が寄ってくる。

隼人「何やってんの？」

和恵「今日は結婚記念日だから……」

隼人「くっだらねえ」

隼人、食卓の上のケーキを握り拳で叩き、ぐちゃっと潰す。

和恵「何するのッ」

隼人「あいつなら帰ってこねえよ。結婚記念日なんてぜってえ忘れてる」

隼人、怒ったように出ていく。

和恵「……」

×

×

×

和恵、食卓で仮眠している。

蒼夏羽、そばに、寄り添うように立っている。

和恵、ハツとして顔を上げる。掛時計を見れば、午後11時。

食卓の上の携帯を手にとって電話をかける。

携帯電話「電波の届かないところにあるか、電源が入っていないため繋がりません」
和恵「……」

×

×

×

（時間経過）和恵、電話をかけている。

携帯電話「……電源が入っていないため繋がりません……」

×

×

×

（時間経過）和恵、電話をかけている。

携帯電話「……電波の届かないところにあるか……」

×

×

×

（時間経過）和恵、電話をかけながら横目で掛時計を見ると、もう深夜2時。

携帯電話「……電源が入っていないため繋がりません……」

和恵「あああああ……」

和恵、取り乱して、食卓に配膳された料理を両手で払い落とす。

食器が落ちて割れる、破片が散る。床に散乱する、醜く潰れてしまった料理。

蒼夏羽「（一部始終を見つめて）……」

○ 繁華街（夜・同年・蒼夏羽の夢）

一義（57）が若い女の腰を抱き、連れて歩いている。

和恵、その後をつけていたが、途中で追う気力を無くして、立ち止まる。

和恵「……夫を、返して……」

一義と女の背中が、遠のいていく。

○ 精神神経科・診察室（同年・蒼夏羽の夢）

和恵、精神科医（男・高齢）の診察を受けている。

精神科医「相変わらず眠れませんか？」

和恵「……（生気がない）」

精神科医「お薬は、飲んでいますね？」

和恵「……（目がうつろ）」

○ 高崎総合病院・前（同年・蒼夏羽の夢）

救急車が入ってくる。

○ 同・廊下（同年・蒼夏羽の夢）

救急隊が、ストレッチャーに乗せた和恵を運んでくる。

看護婦が駆け寄ってくる。

救急隊「（看護婦に）自殺未遂、オーバードーズです」

○ 同・病室（同年・蒼夏羽の夢）

和恵、ベッドに腰掛けて、窓の外、暗く沈んだ曇り空をぼんやり眺めている。

隼人が林檎の皮を剥いている。

隼人、能面のように生気のない和恵の顔を見ると、剥くのを止めて、林檎を置き、ナイフでグサツと刺す。

隼人「あいつを、殺してやりたい……」

隼人の姿が幻のようにすっと消える。代わって蒼夏羽の姿が現出する。

蒼夏羽、まるで人形のように動かない和恵を、優しく抱きしめる。

蒼夏羽「あなたのこと、もっと教えて……」

○ ラブホテルの一室（28年前・引き続き、蒼夏羽の夢）

バスローブ姿の清志（51）と和恵（28）がベッドに腰掛けている。

清志「やってほしい仕事があるんだ……」

和恵「あなたにとって、私って道具なんですね……」

清志「村田技建が勢いを伸ばしてる。今のうちに芽を摘んでおきたいんだ、頼む」
和恵「……」

和恵、清志の肩にもたれるが、どこか悲しげな表情。

○ 工事現場（同年・蒼夏羽の夢）

重機に囲まれた、作業現場。

一義（31）が現場監督をしている。

長谷川建設の高尾（32）のち、副社長）が和恵を連れてやってくる。

高尾「高村さん、相変わらず熱入ってますね」

一義「ハセ建さんの下請けも、今回で最後になるかもしれませんが（不敵な笑み）」

高尾「そう言わず、今後とも仲良くしましょうよ……それにしてもあなたは大した人だ。村田さんにはもったいない」

一義、鼻で笑ってかわし、

一義「（和恵が気になり）そちらは？」

高尾「うちの経理です。現場を見てみたいと言うから」

和恵「はじめまして」

会釈する和恵、容貌が美しい。

一義「…………（思わず見とれる）」

○ 市営の野球場（同年・蒼夏羽の夢）

一義、少年野球の指導をしている（バットの振り方を教えている）。

和恵、ベンチから、その光景を微笑んで見つめている。

x

x

x

ベンチにいる和恵へ、一義が寄ってきて、

一義「子どもと一緒に甲子園目指すような、そんなバカ親父になるのが夢でした」

和恵「だったら私は、そんなバカ親父と子どものためにお弁当つくるのが夢です」

一義と和恵、互いに微笑み交わす。

○ x x アパート・和恵の部屋（同年・蒼夏羽の夢）

キッチンで、エプロン姿の和恵が電話にでている。

そのすぐ後ろに清志がいて、和恵のカラダをまさぐっている。

一義の声「今さっき辞表を叩きつけてやりましたよ。せいせいしました」

和恵「ごめんなさい。全部私のせいですね…」

一義の声「気にしないでください。それより、おたくの社長から、うちに来ないかって誘われてるんです。まさに渡りに船ですね」

和恵「え？」

和恵、振り向いて、清志の顔を見る。

清志、口元が笑っている。

○ どこかの街角（夜・同年・蒼夏羽の夢）

和恵、指輪ケースを開き、婚約指輪を見つめている。

和恵「…………」

和恵、指輪ケースを一義へ返して、

和恵「……ごめんなさい。やっぱり受け取れません」

一義「……」

和恵「それと、私のこと、今日を限りに忘れてください……」

一義「どうしたんだ、急に……」

和恵「……（うつむく）」

一義「言ってくれなきゃ、何もわからないだろ」

和恵「……」

一義「理由もなく君のこと忘れろって……そんなことできるわけない」

和恵「……」

一義「できるわけないだろ」

和恵「理由が、あればいいんですか？」

一義「……」

和恵「……正直に言います……私は高村さんが職場にいらなくなるよう、仕掛けられた罠です。私、社長の操り人形なんです……ごめんなさい……私を憎んでください……嫌いになって、そして、忘れて……（涙が溢れてくる）だから……会社は、辞めないでください……」

一義「……」

和恵「……まだ、間に合います……私、高村さんの上司に全てお話しますから……」

一義「そんなことか……」

和恵「……え？」

一義「だから、そんなことかって……」

和恵「……」

一義「僕も正直に言うよ。そんなこと百も承知だった、知ってた。村田の二世が、会社の機密を君に漏らしてた。違うか？」

和恵「……」

一義「あいつは僕の存在が邪魔なんだ。僕がいると社長になれないと、そう思い込んで怯えてる、ひがんでる。だから君とつるんだ」

和恵「……」

一義「ハセ建は私を潰したかったのだろうが、それを望んでるヤツは身内にもいたんだ」

和恵「……そこまでわかってて、どうして……」

一義、和恵を力強く抱きしめる。

指輪ケースが一義の手から落ちて、指輪がアスファルトの地面に転がる。

一義「騙されたっていい。一日でも長く、君と一緒にいたかった……こうして君を抱いてると、孤独を忘れる……たぶん、それは君も同じじゃないか？」

和恵「……」

一義「君は誰よりも強く愛されることを望んで……それは、僕も同じなんだ……」

和恵「……（涙が止まらなくなる）」

一義「僕は、君のいる会社へ行くよ……」

和恵「やめて……社長はきつとあなたを利用する……そういう人なんです」

一義「構わないよ。社長には子どもがいらないじゃないか。だったら社長のポストだつて狙えるんだ。昼夜忘れて働く。上り詰めてやる。逆に僕が利用してやるんだ。君には何一つ不自由させない、誓うよ。だからそばにいてほしい。一番近い場所で、僕を見ていてほしい。今の僕に必要なのは、ただ君だけだ……」

一義、和恵に口づけする。

○ 長谷川建設・社長室（同年・蒼夏羽の夢）

社長デスクに清志がいる。その前に、和恵が立っている。

デスクの上には指輪ケースがあり、清志、中の婚約指輪を見つめる。

和恵「……私、高村さんと結婚します」

清志「……」

和恵「社長のこと、好きでした……私のあしながおじさんでした。倒産しかけた父の会社を救ってくれたことも、大学まで行かせてもらったことも、本当に感謝しています。私、社長のためならどんなことでもできました……けど、今はもう、よくわからないんです……高村さんは私のことだけ見ていてくれます。私だけの高村さんでいてくれるんです……私、こんなふうに大切にされたの、はじめてで……」

清志「（遮って）それ以上言わなくていい。興味がない」

清志、ぱたんと指輪ケースを閉じる。

清志「高村は、無論これからの実績次第ではあるが、いずれわしの養子にするつもりだ。あいつはかなりの野心家だ。社長の椅子とセットなら喜んで養子にでも何でもなるだろう……どういふことか、わかるか？」

和恵「……」

清志「高村もおまえも、私からは逃れられんということだ……最後の、最後までなあ」
和恵「……」

清志「わしはな、利用価値のあるものは全て利用する主義だ。それでここまで会社を大きくすることができた。いや、もっとはつきり言おうか。わしは金と権力にしか興味がない」

清志、席を立つ。

清志「……が、おまえらに、わしの会社を手放しでは譲らんよ」

清志、和恵に襲いかかる、抱きついて、カラダを触る。

和恵「（振り払って）やめてください！」

清志「抵抗するなッ。誰か来てみる、高村に知れるぞ」

和恵「……」

清志、むりやり和恵を押し倒す。

和恵「いやッ！」

清志「石女（うまづめ）の妻に代わって、わしの子を産むんだ」

和恵「やめてください！（もがく）……やめてッ」

清志「これだけは言っておく。高村など、所詮はわしの道具に過ぎん。もっとも、最高に利用価値のある道具だがなあ（笑う）」

○ 同・居間（それから3年後・蒼夏羽の夢）

清志（5才）が膝の上に赤子（2才）をのせて、可愛がっている。

そばに、和恵（3才）がいる。

清志、赤子の内股をさすって、

清志「こんな所にたくさんホクロがある。お爺ちゃんの子だなあ（笑う）」

和恵「……」

清志「そんな顔するな。あいつに知られたくなかったら、わしには逆らわんことだ」

和恵「……（唇をかみしめる）」

○ 金剛山観音寺・寝室（深夜・蒼夏羽の夢、おわり）

蒼夏羽、目を覚ます。

隣の布団で、和恵が寝ている。和恵の寝顔は穏やかで、微笑んでいるかのよう。

蒼夏羽「（和恵を見つめて）……悪夢から、解放されたようね……」

○ チャペル・中（28年前・和恵の夢）

神父の前で、一義（31）が和恵（28）に優しい口づけをする。

一義の微笑みに、和恵が微笑みで返す。

○ 同・表（同・和恵の夢）

列席者が投げる花びら（フラワーシャワー）が舞う中、一義が和恵の手をとって階段をゆっくり下りていく。二人の笑顔が、最高の幸せに満ちている。

○ 金剛山観音寺・本堂（翌朝・和恵の夢、おわり）

蒼夏羽と和恵が並んで歩いている。

本堂の前を、通りかかる。

参拝客（高齢者男女）数人が、本尊の夢違観音を前にし、熱心に拝んでいる。

中でも、目を閉じ時間をかけて拝み続けている老婆の姿が一際目につく。

和恵「（老婆を見て）……」

蒼夏羽「千年の昔から、ずっと続いてきた光景だと思う」

和恵「……」

蒼夏羽「病い、飢え、終わらない戦（いくさ）……現実という絶望の中で、人々はせめて夢の中に、束の間の救いを求めてきた……私には、その姿が思い浮かぶ」

和恵「……」

蒼夏羽「そしてそれは今も変わらない……夢は、観世音菩薩が私たちに与えてくれる、慈悲よ」

和恵の頬を、涙がつうつと流れ落ちて、一条の線をつくる。

和恵「……夫の夢を見ました……」

蒼夏羽「……」

和恵「忘れかけていた、ずっとずっと昔の、優しいあの人が、そこにいました……」

和恵、涙が止まらなくなる。顔を両手で覆う。

和恵「先生、ありがとうございます……これからは夢の中で、あのときの夫に、私のことだけ見ていてくれた夫に、もう一度出会えるんですね……」

少し離れて、櫻井と和田の姿が見える、ゆっくりとこちらへ近づいてくる。

蒼夏羽と櫻井、お互いに目が合う。

○ 同・書院

和恵と、蒼夏羽・櫻井・和田が対面している。

綾乃と、千石（ギブスをしている）もいる。

和恵「息子の隼人は夫の子ではありません。私と義父の、清志の子です。ずっと隠してたんですが、2年前、夫に知られてしまいました。夫は家庭より仕事を優先する人でした。私が悪いんです……夫が出世すれば私が喜ぶと、そんなふうに思わせてしまったんだから……私は夫と息子を引き離しておきたかったんです。怯えていました。いつ夫に知られるんだろうって……隼人を育てたのは私と義父です。義父は隼人が小さい頃から自分の子だと吹き込んでいました。隼人が思春期を迎える頃にはもう、夫の言うことなど聞かなくなり、家庭は荒れました……」

蒼夏羽ら一同「……」

○ 長谷川一義邸・隼人の部屋（夜・2年前・和恵の回想）

血相を変えた一義（57）が、ノックもしないで部屋に入る。

隼人（23）と恋人・野原美佳（23）がテレビゲームして遊んでいる。

遅れて、和恵も入ってくる。

一義「また仕事辞めたのか……」

隼人「（ゲームしながら）関係ねえだろ」

一義「働く気あんのかッ」

隼人「だからねえって何度も言ってるんだろ。おまえ勝手に子会社と話つけてくんないよ。向こうの人事が迷惑してたぞ」

一義「……私の、せいにするのか」

隼人「心配すんな。あと10年遊んだら、おまえの椅子をもらってやる」

一義、隼人からゲーム機のコントローラーを奪うと、壁に叩きつける。

一義「甘ったれるなッ」

隼人「なにすんだよ！」

隼人、一義を睨みつけ、立ち上がると、そのまま取っ組み合いになる。

一義、隼人を殴り、突き飛ばす。

隼人、ベッドの角で腰を強く打って、うずくまる。

和恵「あなた、もうやめてッ」

和恵、一義にしがみつく。

隼人「痛ううう」

それを見て、慌てた美樹が二人の間に割ってはいる。

美樹「前から言おうと思ってたんだけど、あんた隼人の何なの？ 父親ごっこしてんの？

血も繋がってないくせにさ」

隼人「美樹、よせッ」

一義「……（意味がわからない）」

美樹「何も知らないんですよ、だから教えてあげるッ」

隼人「美樹、よせって……」

美樹「隼人の父親はあんたじゃないの。私全部知ってんのよ。養父に奥さん寝取られたんだってえ？ AVじゃあるまいしさ、ウケる」

一義「……何を言ってる？」

和恵「……（顔をそむける）」

隼人「わりいけど、そのまんまだよ……爺ちゃんが言うなって言うから、黙ってただけ」

美樹「知ってるう？ カッコウってね、他の鳥の巣に卵産んで、育てさせるんだってえ」

一義、カッとなり、美樹の頬をひっぱたく。

隼人「やめろッ！」

和恵「あなたッ（やめて）」

隼人、起きあがり、一義にタックルする。一義、転倒する。

隼人「女殴んな、クソ野郎ッ」

隼人、一義に馬乗りになって、殴る。

和恵「……………（茫然自失）」

○ 同・リビングキッチン（同）

食卓テーブルに、一義と和恵がいる。二人、会話なく、重い沈黙が続く。

一義「……………」

和恵「……………」

和恵の声「夫はただ一言、どうして言ってくれなかったと……それだけでした……………」

一義、うなだれたまま、立ち上がる。

和恵と目を合わせることもなく、出ていく。

和恵「……………」

和恵の声「夫は家に帰らなくなりました……………仕事一筋だったのが、人が変わったように女遊びを繰り返すようになりました……………」

○ どこかの温泉宿・客室（同）

座卓に、豪勢な料理が配膳されている。

長谷川清志、隼人、和恵、そして清志の愛人である若い女がいる。

清志、愛人の肩に手をかけ、抱き寄せている。

隼人が、清志の手元のワイングラスに、赤ワインを注ぐ。

清志「（隼人に）そうか、とうとう言っちゃったか……見たかったなあ、あいつの苦痛に歪む顔がよ……絶望という名のワインを寝かせて寝かせて、それからたっぷり味わってやろうと、思ってたんだがなあ（笑う）」

清志、ワインに口をつける。

清志「（隼人へ）一個の人生をもてあそぶことほど愉快なものはない」
和恵「……………」

○ 高崎市科学館・外観（1年前 ※実体験に基づく和恵の回想は、ここでおわり）

寂れたプラネタリウム。

○ 同・プラネタリウム（同）

ほとんど誰もいない閑散とした客席に、一義（88）がいる。
ドームに映し出された星空が一斉に瞬いて、綺麗だ。

和恵の声「夫は子どもころ家族でよく行っていたという古いプラネタリウムで、奥寺さんに会ったようです」

×

×

×

奥の操作室（コンソール）で、奥寺聡美（33）、パソコンをシャットダウンするなど、閉館作業を始める。

聡美、客席をぐるっと見渡す。未だぼつんと独り残っている一義に気づく。

×

×

×

客席へ沈み込むように座っている一義、その表情が重い。
その顔を、聡美が上から覗き込んでくる。

一義「……あ、ごめんなさい、もう帰ります（立ち上がろうとする）」

聡美「（一義の沈んだ気持ちを敏感に察知し）……あの、よろしければもう一度だけ、上映しましょうか？」

一義「（聡美の優しい微笑みに見とれて）……」

×

×

×

プラネタリウムの番組が上映されている。天の川が、幻想的で美しい。
客席に、一義と聡美、隣同士並んで星空を眺めている。

一義「……星の瞬きを見ればこの世のことなんてちっぽけに思える、って、あれ、ウソですよ……」

聡美「……？」

一義「……ぜんぜん小さくありません……本当に、ぜんぜん……」

聡美「……」

一義「私は…家族を失いました……」

聡美「……」

一義「ずっと走ってきました…すべてを犠牲にして…妻のために、家族のために…けど私は、本当は独りだったんです…：…：…いたい何をしていたのか、何を求めているのか、私が欲しかったものは、何だったのか……」

聡美「……人生には、立ち止まることも必要だと思います」

一義「……」

聡美「私も今は、休暇中ですから（微笑む）」

一義「え？」

聡美「私も大切な人を失いました…：…婚約を破棄したんですよ、私。カレは私より、いつも仕事を選んでいたので……」

一義「……」

聡美「今から思うと馬鹿だなんて思います…：…仕事に嫉妬するなんて…：…カレ、刑事だったんです。母親を強盗に殺されて、なんていうか、すべての犯人が母親の仇に見えてたんだと思います。だからホント私のことなんてほったらかしで…：…でも、失ってはじめて気づくことって、あるんですね…：…やっぱ、私独りは嫌なんだなあって、独りでも全然平気ッ、なんて思ってたのに…：…（気丈に微笑んで見せる）」

一義「……」

聡美「（星空を見つめて）お星様って、なんで独りでもあんなに輝けるんだろう……」

一義「……」

○ 金剛山観音寺・書院（現在）

和恵「夫は奥寺さんと同棲するようになり、私は自殺未遂を繰り返しました。夫を、振り向かせたかったんでしょうね…」

蒼夏羽ら「……」

和恵「あるとき、黒川会から連絡が入りました。佐伯という男が私のところへ来ました。夫と女を別れさせてやると言われて…：…薬にもすがる思いでした…」

○ 長谷川一義邸・リビングキッチン（深夜・1ヶ月前・和恵の回想）

泥酔し、リビングのソファで寝ている一義の姿。と、それを見つめる和恵。

和恵の声「奥寺さんが住むマンションの鍵を盗むと言われました。夫はほとんど帰ってこないので無理だと思いましたが、ふいにチャンスが訪れました」

和恵、一義の足元にあった鞆を奪い、素早く中を漁る。
和恵、マンションの鍵（防犯性の高い鍵）を見つける。

○ 金剛山観音寺・書院（現在・和恵の回想、おわり）

和恵「私は佐伯と奥寺さんのマンション前で待ち合わせをし、鍵を渡しました。私は奥寺さんがヤクザに怯えて身を引くと、勝手にそう思っていたんです」

○ 白鷺マンション・表（1ヶ月前・事件当日）

ベントが停まっている。運転席に、シャネルのサングラスをした和恵がいる。
マンションから出てきた佐伯と大貫が、和恵に寄ってくる。

和恵、サングラスを外し、ドアウィンドウを下げて、二人と何か話をする。

和恵の声「佐伯から、奥寺さんのお腹の中の赤ちゃんを殺したと、そう聞かされました」

x

x

x

（時間経過）聡美、マンションの玄関から出てくる。半ば放心状態で足元がふらふらである、覚束ない。（※ちなみに暴行を受けたのは腹部だけである。）

和恵の声「佐伯がいなくなった後も、私は動けずにいました。取り返しのつかないことをしてしまった、という思いと同時に、私の中の悪魔がさやくんです。自分が味わった苦しみと同じだけのもの、いいえそれ以上のものを与えてやったんだと……私は奥寺さんに会って顔が見たいと思いました。けど、なぜだか足が震えて車から降りられなかった……そんなとき、奥寺さんの方から表へ出てきたんです。病院へ行くつもりだったんでしょか」

聡美「（和恵の姿に気づいて）……」

○ 同、ベントの中（同）

和恵と聡美、車の中にいる。

助手席で、聡美、ぼろぼろに泣き崩れている。

和恵「どんなに泣かれたって、私の気持ちはおさまらない……泣きたいなら泣きなさいッ、もっと！ 私はね、あなたの十倍、いいえ百倍は泣いてきたからッ」

聡美、和恵の手をつかんで、

聡美「赤ちゃん返して：」

和恵「痛いッ。放してよッ」

聡美「返して：私の赤ちゃん返して！」

和恵、聡美の頬をひっぱたく。

和恵「どうせなら赤ちゃんじゃなくて、あなたに死んでほしかった」

聡美「……」

和恵「自分だけ幸せになれるなんて思わないでよ！ 私は一番大切な人をあなたに奪われたッ。私だってあなたから奪ってやる権利、あるんだから。産まれてもない赤ちゃんが死んだくらい、何なのよッ。いつそあなたが死んで私に詫びなさい！ 私にしたこと全部、詫びなさいよッ」

和恵の声「私が奥寺さんの赤ちゃんを奪ったも同然なのに、あのとき、どうしてあんな酷い言葉がでたんだろうって……けど、それが私の本心だったんでしょね……私は奥寺さんを憎んでいました……本当に、殺してやりたいほど憎かったから……」

○ 白鷺マンション・聡美の部屋（同）

ベランダに立つ聡美、眼下を見下ろしている。

聡美「（泣きながら）……もういい……もう、いいよ……」

聡美、狂ったように泣き崩れ、嗚咽し、ベランダから飛び降りる。

和恵の声「その後で、奥寺さんは飛び降りたようです……」

○ 金剛山観音寺・書院（現在）

櫻井「……」

和田「櫻井さん……」

和恵「（櫻井に）あなたの元恋人だと、先生から聞いています……ごめんなさい……でも、これが私なんです……私は、こういう女です……」

櫻井「……」

蒼夏羽「（櫻井を見つめて）……」

和恵「夫は義父と真正面から対立していました。もちろん隼人のことがきっかけです。社内は真っ二つに割れました。と同時に、夫の独断専行が目立つようになりました。義父は夫のことが手に負えなくなると、黒川会の手を借りて脅しを入れたようです。それが結果的には夫と黒川会との関係を修復不能なものとし、夫は暴排条例を盾に今度は黒川会の排除を画策しました。このとき、奥寺さんも巻き込まれて、既に何度か脅迫を受けていたようです。夫が警察に通報しなかったのは、会社や家庭のゴタゴタを表沙汰にしたくなかったからでしょう」

○ 長谷川一義邸・リビング（１ヶ月前・和恵の回想）

包丁を握って暴れる一義を、和恵がしがみついて抑えている。

和恵の声「夫は奥寺さんの飛び降り自殺を知ると、すぐに義父を疑いました」

床に落ちているスマホ。

その画面、メールの文章が映し出されている。

聡美の声「ずっと悩んだ。私がないほうが、あなたは幸せになれるんじゃないかって……この子と二人、何処か、あなたの知らないところで暮らそうかとも思ってた……でもね、私もう行く場所がなくなった……結局、また独りぼっちになっちゃったよ……」

一義「殺してやる……」

和恵「やめて、お願いだからッ」

一義、しがみつく和恵を振り払って、

一義「あいつが聡美を殺したんだッ！ 自殺じゃないッ」

和恵「……」

一義「何とか言えよッ」

和恵「……」

一義「……そうか……そうだよな、考えてみりやおまえがあいつをかばうのも当然か。おまえはあいつの愛人だった、あいつの子を産んだ、二人して１０年２０年私を欺いてきたんだ……こんな馬鹿げた話ってあるかよッ（ゲラゲラ笑う）」

和恵「違うから！ 私はあなたに、人殺しなんてしてほしくない」

一義「人殺しはおまえらの方だろがッ！」

一義、部屋を出ようとする。

和恵「（慌ててしがみついて）待って！」

一義、和恵を振り払う、と、包丁の切っ先で和恵の腕が切れる、血が流れる。

和恵、腕をおさえ、痛みで、その場にしゃがみ込んでしまう。

一義、「しまった」と一瞬戸惑うも、背中を向けて出ていってしまう。

和恵「（去りゆく一義を見つめて）……」

○ 金剛山観音寺・書院（現在）

和恵「別居していた義父に、私はすぐ連絡しました。夫に人殺しをさせたくなかったからです。勝手ですよ、奥寺さんは私が殺したも同然なのに……義父は家を出ると雲隠れしました。夫はその隙に自分が会長に就任、子飼いの部下を社長に据えようと根回しをはじめました。義父は熱海の別荘にいました。そこで夫の動きを部下から知らされ、激怒して自ら夫に電話をかけたようです。夫は熱海へ向かいました……あるいはもしかすると、そこで義父を殺すつもりだったのかもしれない……」

○ 高速道路（夜・1ヶ月前）

一義の交通事故現場である。

中央分離帯に激突した車が横転し、大破している。

和恵の声「そして、あの事故が起きました……」

○ 金剛山観音寺・書院（現在）

和恵「運転手の岡田は夫にうまく取り入り、身の雑務を務めていました。義父は岡田を通じて夫の動きを知っていて、最後は……使い捨てたんだと思います。今になってわかることです……」

和恵「岡田は黒川会には負い目があったでしょう、が、会長のためにそこまでの理由はないでしょう」

和恵「義父は黒川会から岡田を買っていたんじゃないでしょうか……」

和田「買った？」

和恵「はい。それに、夫は黒川会を排除しようとしていましたから、黒川会にとっても夫の存在は邪魔になっていたと思います」

和田「利害の一致、ですか…」

和恵「はい」

和田「…結局、あなたは最初からすべて知っていたんですね？」

和恵「……（うつむく）」

和田「今の話、全て公にしてください」

和恵「……わかりました…」

櫻井、不機嫌そうに目を逸らす。

和田「…櫻井さん？」

櫻井「……違う…俺が知りたいのは、そんなことじゃない」

和田「……？」

櫻井「俺が知りたいのは、そんなことじゃないんだッ」

和田「なんですか、急に」

櫻井「どうしてあいつが死ななきゃならん！ どうして！ どうしてだッ！」

櫻井、座卓を殴るように激しく叩く。

和田ら一同「……」

櫻井、和田の胸ぐらをつかんで、

櫻井「和田ッ！ なんでだ！」

和田「櫻井さん……」

櫻井「言ったら。オレは理由が知りたいって。いったいどこに聡美が死ななきゃならなかった理由があった？ 教えてくれよ、和田ッ！」

和田「……」

櫻井「なんで聡美が…なんで……」

櫻井、「うううう」と嗚咽し、その場に泣き崩れる。
その姿に、蒼夏羽ら、言葉を失う。

○ 共同墓地（日替わり）

櫻井、「奥寺家之墓」（聡美の墓）の前にしゃがんでいる。

櫻井、花を供えて、手を合わせる。

櫻井「……」

後ろから、蒼夏羽が近づいてくる。綾乃はいない。

蒼夏羽「…櫻井が望むなら、夢違をしてあげられるけど？」

櫻井「夢違？」

蒼夏羽「あなたの夢に、毎夜奥寺さんが現れるようにしてあげる」

櫻井「…そんなこともできるのか？」

蒼夏羽「私はね、夢を操る観世音菩薩の使いなのよ」

櫻井「……」

蒼夏羽「どうする？」

櫻井「パスだな…わざわざ夢に見なくても（お墓を見て）ここへ来れば、話ができる…」
蒼夏羽「そう……」

蒼夏羽、空を見上げて、

蒼夏羽「夏ももう終わりね…蝉の声が聞こえなくなった…」

和田が、駆けてくる。

和田、ぜえぜえ息があがっている。

櫻井「……どうした？」

和田「黒川会の佐伯が、出頭しました」

櫻井「そうか…」

和田「それと…長谷川和恵が、自殺しました…」

櫻井「はあああッ！」

和田「だから…会長パクるの、もう無理だと思います……」

櫻井「……」

蒼夏羽「どういうこと？」

櫻井「奥さんの自供がとれない」

蒼夏羽「……」

和田「なんで僕録音してなかったんだって…」

櫻井「結局、トカゲの尻尾だけかよ……」

蒼夏羽「は？ なに言ってるの。ちょっと待ってよ。まだ終わってないでしょ、ていうか、終わらせないでよ」

和田「終わってますよ…」

蒼夏羽「…だったら、せめて私をラスボス、会長んトコまで連れてきなさいッ！」

○ 高崎総合病院・一義の病室（昨夜）

ベッドで、和恵、一義と並び、その手を握ったまま永遠の眠りにについている。

和恵の表情がとても穏やかである。死ぬ間際まで優しかった頃の一義がでてくる幸福な夢を見ていたのだろう。

和恵「…………（微笑んでいるかのよう）」

床に、空の薬瓶が転がっている。

○ 長谷川清志邸・庭（日替わり）

清志、錦鯉に餌をやっている。

櫻井と蒼夏羽が二人で来ている。綾乃はいない。

清志「令状は持ってきたのか？」

櫻井「長谷川和恵が自殺した。あんたが脅したんだろうが」

清志「令状が無いなら、帰ってくれよ」

櫻井「事実を白日の下に晒せば、長谷川建設の名に取り消すことのできない傷ができる。闇に葬れば、夫が育てた会社を、現社長である息子を守ることにもなる。既に全てを失ってる長谷川和恵なら、どちらを選ぶか？ ……あんたが死なせたんだ」

清志「荒唐無稽な話だなあ」

蒼夏羽「あのね、今ならまだ間に合うから…：真実を告白して、懺悔なさいよ」

清志「はあ？ 誰なんだ君は？」

蒼夏羽「金剛山観音寺住職、神楽坂蒼夏羽が観世音菩薩に代わって警告してあげる。あなた、このままだと地獄へ堕ちるわ」

清志「（高笑いして）地獄？ 地獄だあ？ そんなもん在るかよ」

蒼夏羽「地獄は、在りますよ」

清志「何処にだあ？ 馬鹿にするなよ。寺に帰って経でもあげてろッ」

蒼夏羽「しつかったないねえ…：可哀想だから、これだけは言うておく。誰でも人は最期、夢

を見ながら死んでく。時間感覚の欠如した、永遠の夢をね」

清志「それが、どうした？」

蒼夏羽「教えてあげる。人間の意識の深いところ、無意識が観世音菩薩の正体よ。観世音

菩薩はいつも心の奥の奥、そのまた奥にいて、あなたの人生をずっと見つめてる

…そして最期に審判を下すわ、必ず…」

清志「観音？ いるかそんなものッ」

蒼夏羽「悪いけど、それがいるのよ。きっとあなたを、地獄へ連れていく」

清志「ふざけるなッ！ 人を裁くのは神でも仏でもない。法だ。違うか？ わしに罪があると思うなら、法廷へ引きずり出してみるッ！」

蒼夏羽「いいえ最期に人を裁くのは観世音菩薩ただ独りです（鋭い眼差し）」

清志「……」

○ 同・表

櫻井と蒼夏羽が門構えから出てくるところ。

櫻井「地獄へ堕ちるって、ガキの脅しじゃあるまいし…」

蒼夏羽「（櫻井へ振り返って）地獄は、あるよ（微笑む）」

櫻井「…ウソ、だろ？」

蒼夏羽「ウソじゃない」

櫻井「え、冗談だろ…え、マジ？」

蒼夏羽「マジで」

櫻井「…あるんだ…（半信半疑）」

蒼夏羽「櫻井は最期死ぬとき、どんな夢に包まれていたい？」

櫻井「そうだな…やっぱ、幸せなのがいい」

蒼夏羽「だったら、綺麗に生きることね」

蒼夏羽、足早に、颯爽と、櫻井の前を歩む。

○ どこかのゴルフ場（1ヶ月後）

テロップ「1ヶ月後」

清志、ドライバーショットをする。

と、突然、胸をおさえて、その場にうずくまる。

そばにいた高尾と板倉が、慌てて寄る。

高倉「会長ッ！」

清志「……（苦しそう）」

高尾「（板倉に）救急車を呼べ」

板倉「心不全でしょうか……」

高尾「いいから、早くッ」

○ ××病院・廊下

ストレッチャーに乗せられた清志、急ぎ搬送されていく。

○ 同・CCU（冠疾患集中治療室）

清志が、医師に囲まれている。

清志、ずっと気を失っていたが、突然、大きく目をカツと見開く。

清志「……」

その目、どこか一点を凝視している、何かを見つめているかのよう。

清志の表情は強ばっていて、何かに怯えているようだ。

何か得体の知れないものを、直視しているのだ。

清志「……（頬の筋肉が、びくびく震えている）」

清志、瞳を閉じる、息絶える。

その死に顔が、穏やかな死を暗示させない最悪の悪相である。

（了）

夢違師

2014年3月16日 発行

著者 西田充晴

発行者 李鳳龍(オオハラ.李.ヒデハル)

発行所 描楽書蔵
郵便番号 135-0016
東京都江東区東陽1-28-13-401
お問い合わせ oohara.lee@ka-kuzo.jp
サイト <http://www.ka-kuzo.jp>

本作品のコピー、印刷、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。
本作品を代行業者等に依頼してコピー、印刷、スキャン、デジタル化する事はたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。